



特233

327

古路群山
能心
路



始

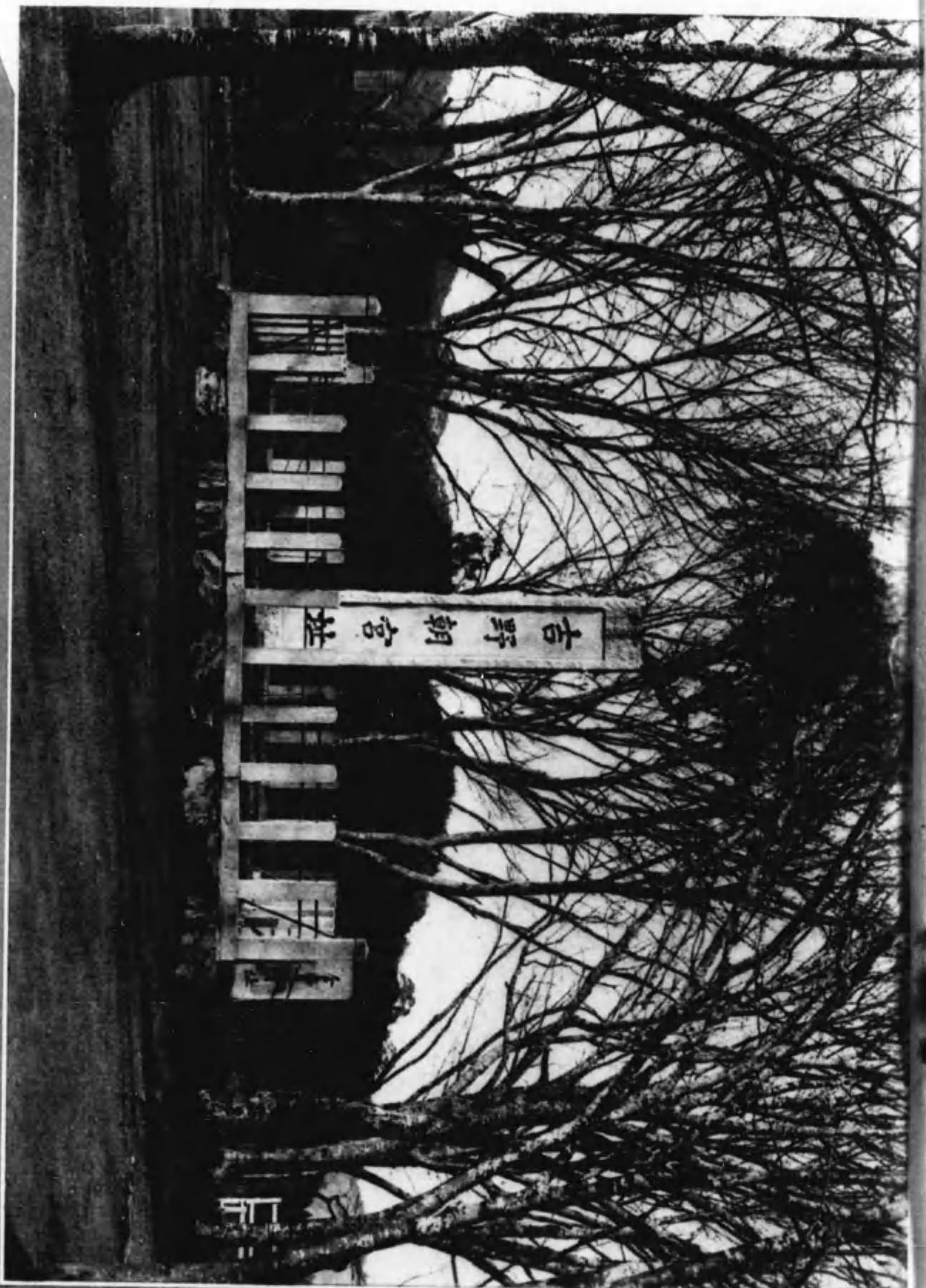


特233
327

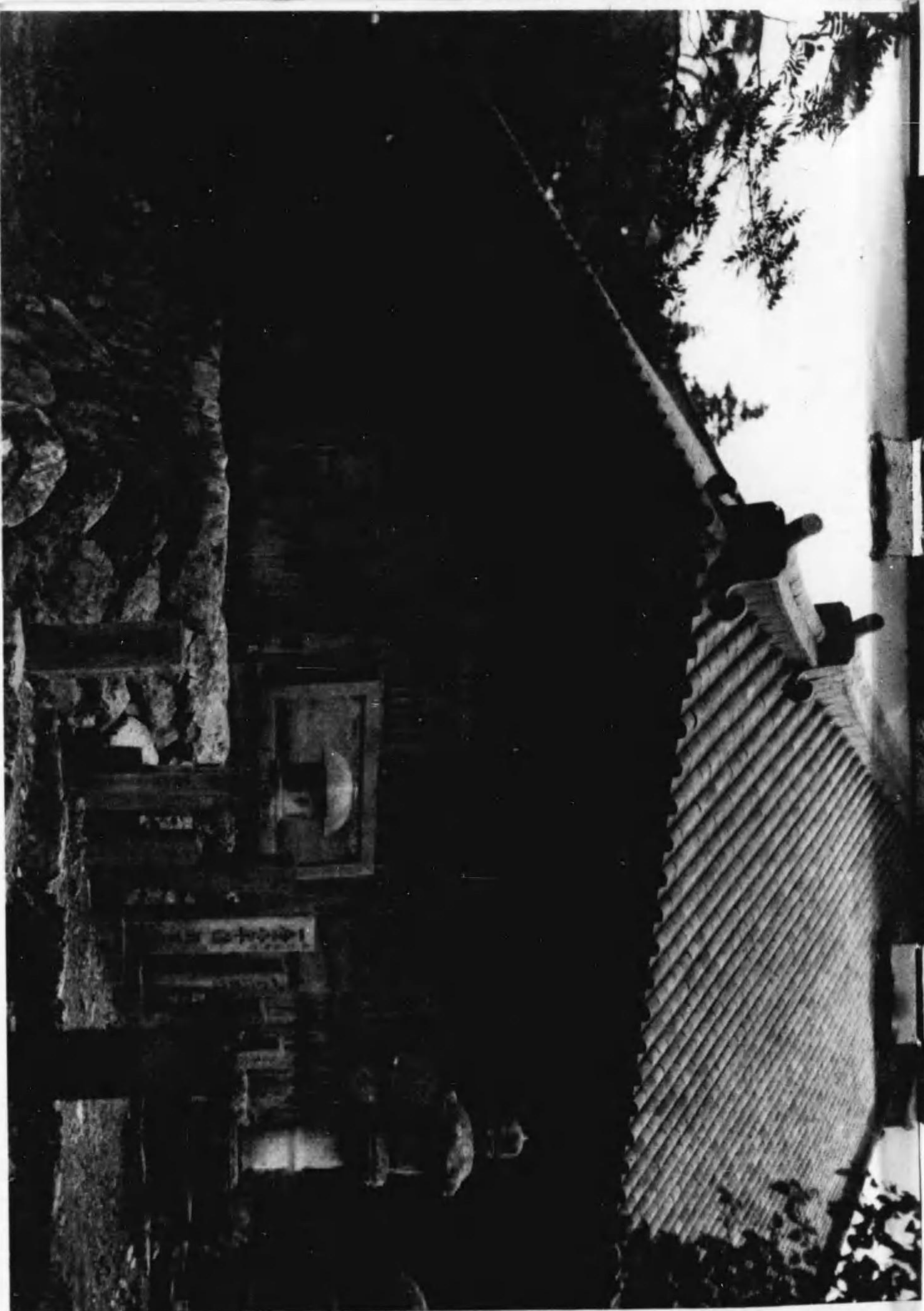
吉野群山と熊野

(昭和十三年版)

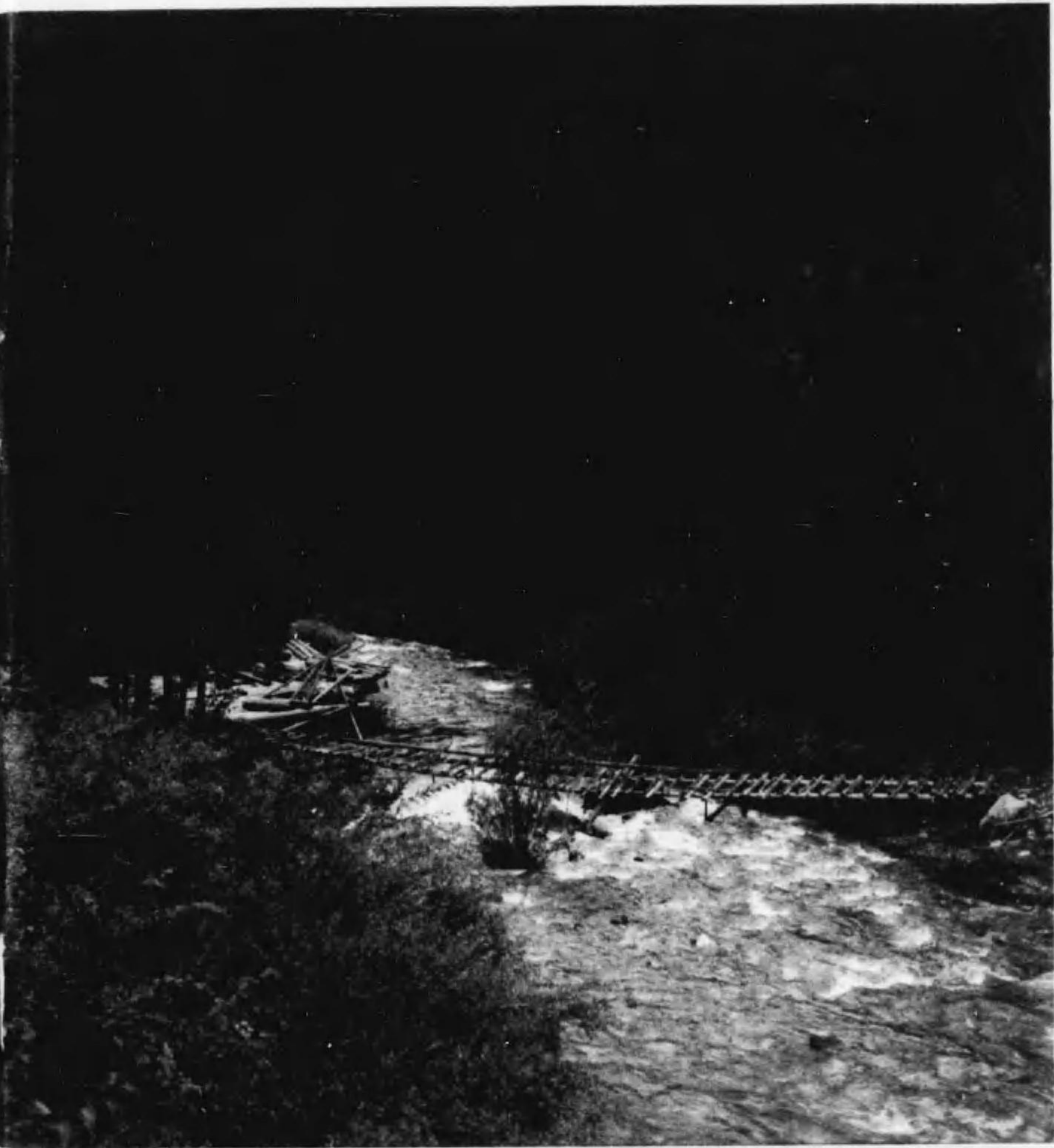
吉野朝宮の址



111



大栗山本堂



洞川の溪流



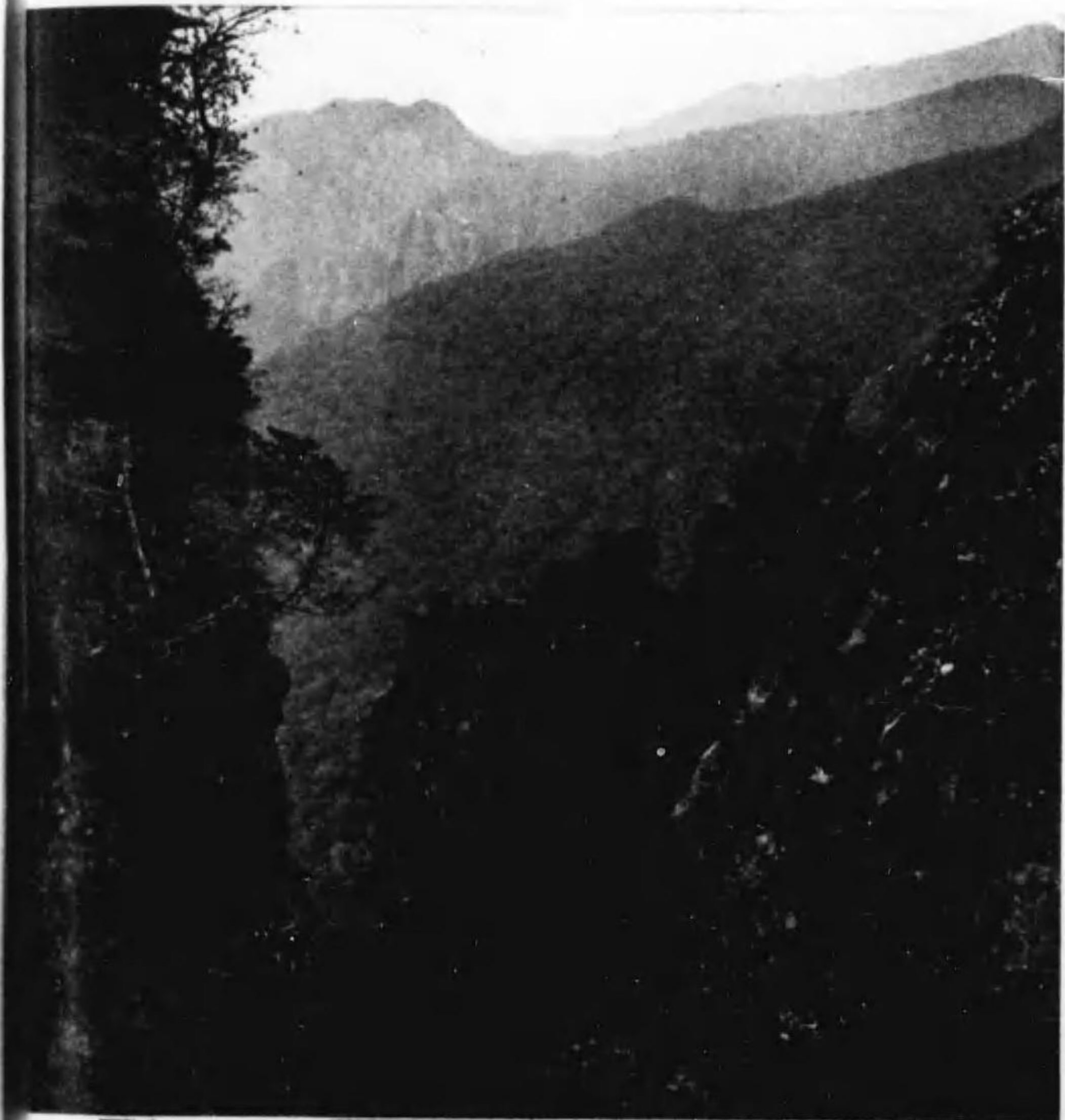
嶽ヶ經八峯高最の山群野吉



觀大の島花お嶽ヶ上山



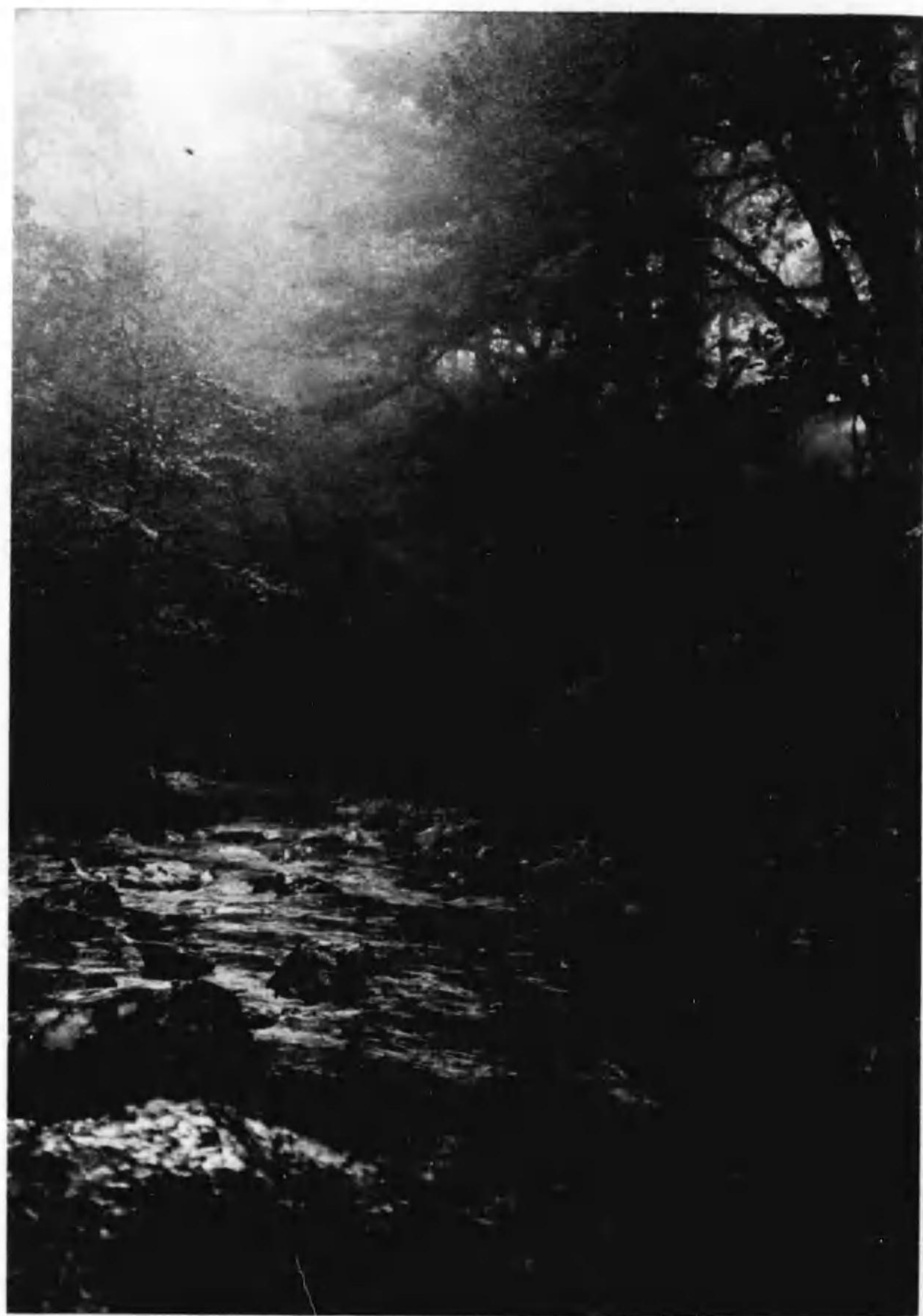
前鬼川大瀧の豪観



緑の鼻の岩石美



深仙附近の山容



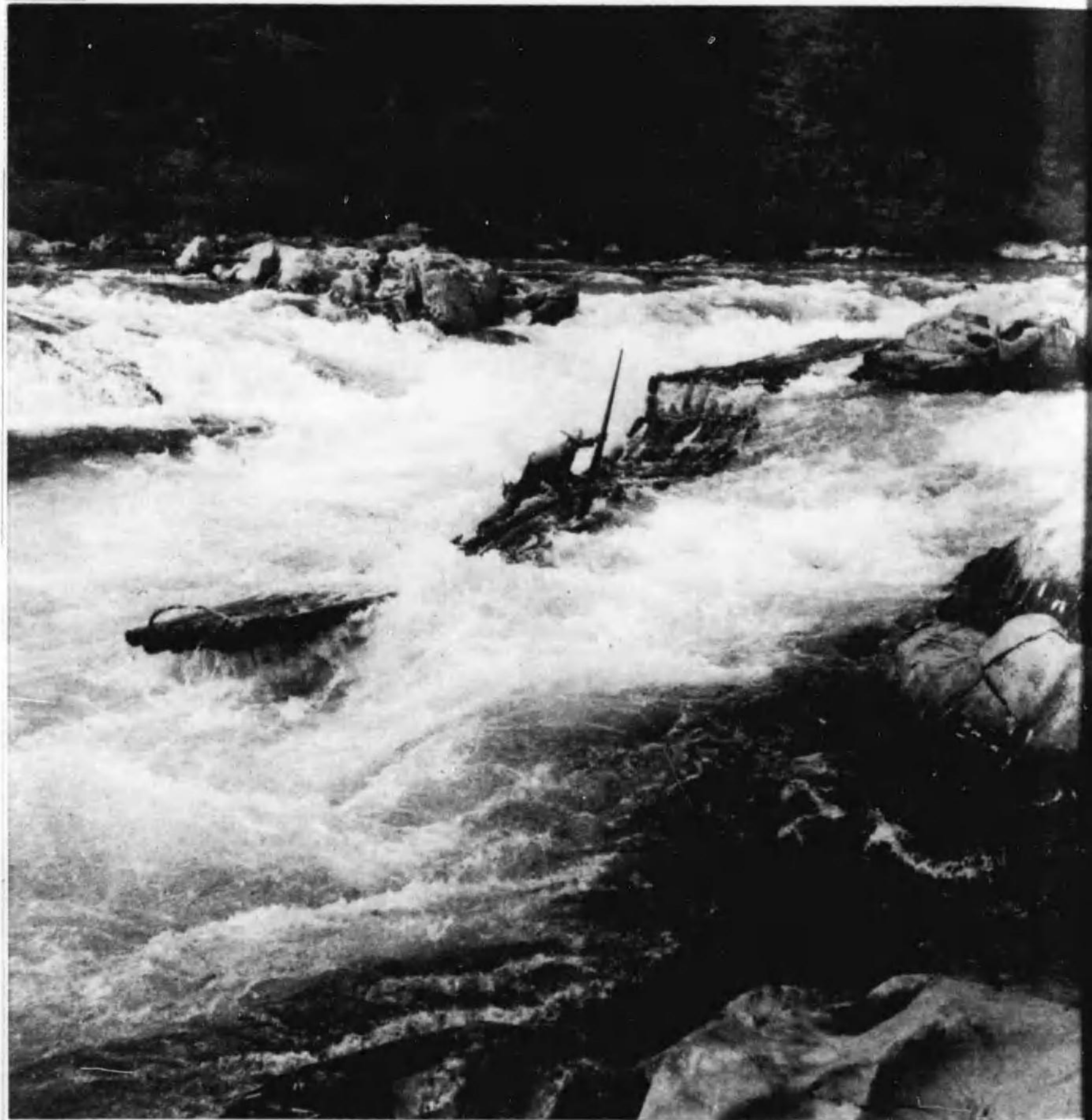
大台ヶ原山上の溪流



名花シヤクナゲの満開



池川谷の幽邃



北山峽の激流



大台ヶ原山の奇雲



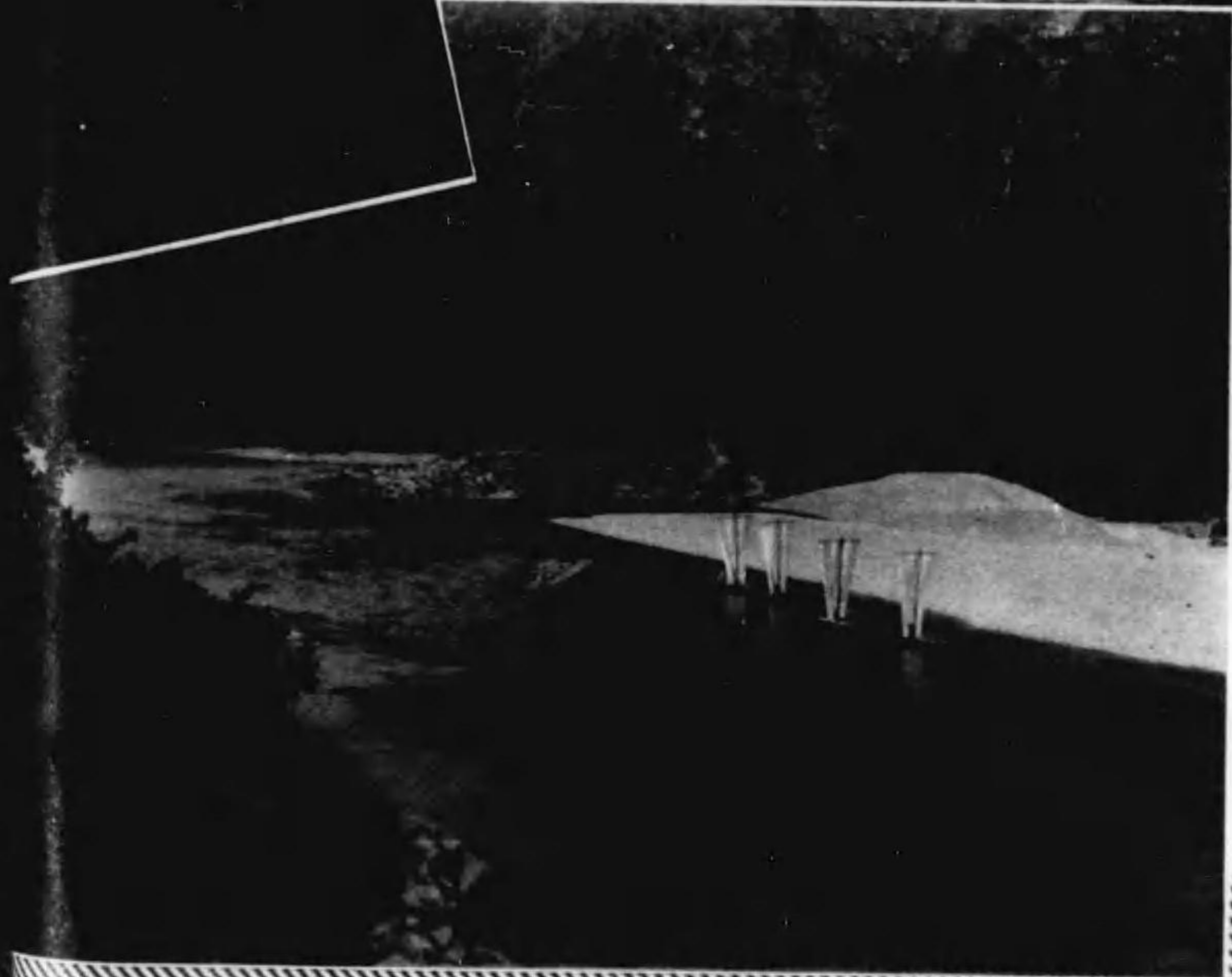
吉野川の上流



丁八瀨峽山北



大杉谷堂倉瀨の幽景



熊野川



勝浦灣口



木ノ本海岸



那智の瀧

濱御里七



高見山の偉容



十津川郷の部落

目次

一、緒言.....

二、修験道と吉野熊野.....

三、旅程の栞.....

 一、大峯山脈の縦走及大台ヶ原登山..... 一〇

 イ、大峯山脈について..... 一〇

 ロ、大台ヶ原山について..... 一四

 ハ、旅程..... 一六

 ニ、後南朝について..... 二〇

 二、山上ヶ嶽登山..... 二二

 三、大台ヶ原登山..... 二四

 四、山ヶ嶽より大台ヶ原山に到る最良のコース..... 二四

 五、東吉野北山地方より漕八丁熊野方面の探勝..... 二五

 六、西吉野大塔十津川地方より漕八丁熊野方面の探勝..... 二六

 七、高見登山..... 二七

 八、高見山より國見ヶ嶽への縦走..... 二七



九、荒神ヶ嶽及高野登山、附伯母子嶽登山……………三六

十、吉野山、山上ヶ嶽、洞川、荒神ヶ嶽、高野山連絡探勝旅行……………三九

十一、高野山、荒神ヶ嶽、伯母子嶽より六里ヶ峯を経て龍ノ神温泉に到り、牛廻山を越へ上湯温泉、下湯温泉を通り十津川郷の探勝……………四〇

十二、大峯山脈の縦走と大台ヶ原登山とを終へて瀨八丁に到るコース……………四三

十三、川迫川を探り行者還ヶ嶽を横断して天ヶ瀬橋に到るコース……………四四

十四、天川、大塔、野迫川方面を探り高野山への探勝……………四四

十五、吉野群山の峽谷探検……………四六

十六、大杉大峽谷の探検……………四六

十七、川迫谷及び瀨山谷の探勝……………五〇

附

ハイキングコース……………五〇

一、吉野山、高サギ岳、峯山コース……………五〇

二、百貝ヶ嶽より吉野山へ……………五三

附 録

一、吉野群山及熊野地方探勝乗合自動車、プロペラ船等に関する詳細は次の所へ御問合のこと……………五三

二、吉野群山熊野方面及其附近の宿料其他一覽表……………五三

三、乗合自動車運賃表……………五五

(一) 緒 言

吉野群山は我國に於て中部地方と共に、大地の幅の最も廣き紀勢和半島の中央部に簇立する大山浪の総稱にして、海拔三千五百尺乃至六千四百尺の高嶺凡そ百座を數ふ。

吉野群山の誇りはその深林美、岩石美及峽谷美に在る。即ち未だ斧鉞を知らぬ太古その儘の原始林は鬱蒼と繁りて全山を美化し、神秘そのものの如き景觀を漾すと共に、隨所に鬼手怪腕の造物主が、神鑿を振つて彫刻の巧妙を極めし巨岩天地を貫きて連立し、その端倪すべからざる大奇觀と、幾万年の間風雨に曝されて現出した暗灰色の蒼然たる色彩とは相俟つて驚嘆すべき岩石美を呈して居るのである。

而してこれ等山浪の裾を縦横に走る大小の溪谷は人を恍惚たらしむる絶景を呈し、清冽なるこゝ玉の如きその流水には美味なる魚類を産して人を喜ばす事大である。

殊にその上流は山迫り谷深く、兩岸に削立する斷崖絶壁や、晝尙暗き原始林の繁りは各所に懸る數百尺の大飛瀑と相俟つて、實に魔境の如き大峽谷を形成してをるのである。

然り、而してこの吉野群山の山嶺より峽谷一帯を包む原始林中には之を世界に求めて得ざる、またその類例の稀少にして尊重すべき幾多の珍奇なる動植物を藏して天下に誇るべき天然紀念物を形成し學術研究上絶好の資料となつてをるのである。

次に尙特筆すべき事は吉野群山には貴重なる史蹟を有するこゝこれである。即ち遠く神武天皇御東征以來役ノ小角の金峯大峯における修行を初め修驗道信仰の幾多の歴史、吉野朝の衰史、その他史上に名を残す各方面の大家の入山を見、これ等は何れも史蹟となつて嚴存せる外、その結晶は精神的に或は物質的に國家の興隆に貢献したるこゝ莫大なるものがある。

而して役ノ小角の修行は我が剛健なる國民性によく合致する修驗道と稱する偉大なる宗教を生みたる事にして、今もその遺教を奉じて根本道場たる山上ヶ嶽に登高參拜するもの毎年凡そ十万人の多きを見つゝあるのである。

さて、この吉野群山の南に續くは即ち熊野地方である。重疊たる吉野の峯巒は此處にもその余波を送つて雄渾なる大自然を展開せしめて海に臨んでをるのである。而して吉野群山に發する溪水は熊野の水を合せて熊野川となり豪宕壯美を謳はれて熊野灘に流れ入る。

靈地に發し聖域を流れてその精魂を集むるこの清水の注ぐ海邊に優秀なる景觀の展開するは蓋し自然のこゝこゝ云はねばならぬ。即ち熊野の海岸は豪快明朗類ひ稀なる大風景と高稱せらる。中にも楯ヶ崎、鬼ヶ城、七里御濱、勝浦、浦神、大島、潮岬等はその最たるものにして世界無比とさへ稱へられてをるのである。

かく雄大明媚を誇るこの天然も更に温泉に恵まれて愈々その光彩を輝すのである。即ち

山境より海邊まで到る處に湧出して遊子を欣喜せしめてをる。

かくも多彩なる熊野の大自然を彌が上にも淨化するは卓越せる史蹟靈場の數多いこゝこゝれである。即ち神武天皇御東征の聖蹟、降つては中世に於ける高貴の熊野信仰、また吉野朝の衰史等々は往年吉野熊野の天地を聖壇とされたいとも貴い史蹟である。もしそれ熊野三山を初めこれ等の淨域を探つてその聖蹟を拜する時、誰か其靈感に感激せざるものあらん。

而してこの熊野三山と大峯山脈とは修驗道によつて連鎖的に結ばれたる靈場であつて、その靈光が剛健なる國民性の心身涵養に寄與せる所、蓋し幾何なるやを知らないものがある。

かくの如く吉野と熊野の地は千古より連なる歴史によつて縦に一貫し、相關聯せる神社佛閣や史蹟を以つて横に結ばれ精神的に貴き一體をなしてをる。更にまたその大自然は兩地相寄つて、初めてすべての森羅万象顯現して優秀偉大なる大風景を形成してをるのである。

以上叙説の外尙一言附加すべき事がある、他に非ず、この地は先住民族の住居地たりしに加へて畏くも神武天皇の御東征により最も早くより皇化に潤つた土地柄なのである。以來この地方が歴史の書に缺くる時代がなく、また時には落武者が安住の地ともなつてをり

常に人文との關係が密接であつた。さればこの地方の文物すべては大いに破壊されてゐるべき筈である。

然るに現實は之に反し人文も天然もまだく原始の佛を髣髴せしむるが如く感ぜらるるもの決して尠くない。而してこの主たる原因は山ミ谷に圍繞された地形の峻嶮な爲であるが、修驗道の偉力の貢獻も亦決して少くはないであらう。

されば吉野熊野の地は只單にその風景ミ天然物を誇りとするに止らず、到る處の山峽に見る多くの民俗資料をも擧げなければならぬ。仍てこの國立公園を訪ふものは我が古き世を偲ばしむ幾多の人情、風俗、習慣、傳承等を探らば盡きせぬ興趣ミ裨益を享受するであらう。

今やこの勝れたる吉野熊野の精髓部が一丸の國立公園として指定されたることは誠に意義の深いことと謂はなければならぬ。さにはこの國立公園に關係あるものは素より此處に遊ぶものも相共に當園のもつ特異性に深く思を致し以て指定の意義に副ふべく努めなければならぬこと、信ずる。

(一) 修驗道と吉野熊野

吉野群山の帝王たる大峯山脈は修驗道の根本道場であり熊野三山亦修驗道によりてその靈驗愈々高く仰がれるに立到つたのである。されば吉野熊野の眞髓に觸れんせば勢ひ修驗道を玩味することが必然の歸結となるのである。

凡そ千二百余年の昔大和葛城山麓の人役の小角が各地の山岳において苦修練行し體得した精神や行法が修驗道の濫觴をなすのである。

小角思へらく、我國民性は極めて剛毅であり、また末世の衆生は頗る強惡のものとなり、この國民を、更にまた、將來の難化の衆生を濟度せんが爲には今存在する渡來の御佛では何れもその精神姿相が優しきに過ぎて到底其の目的を達成することは至難である、されば必然これ等の衆生を濟度するに相應しき、我國に獨得なる御佛の出現こそ望まじけれとの念願に燃えて、金峯山上において自己が理想の御佛の顯現を祈つた、時に小角三十七才頃の事であつた。

この熱願に應じて現はれたのが、藏王權現である。仰げば怒髪逆立ち身體は青黒色で背後には大火焰を轉じ右手には三鈷杵を振り上げ左手は刀印を結んで腰に安んじ右足は天ミ地ミの中間を蹴り左足は力強く磐石を踏みしめ、顔相は眦裂け巨眼睨視兩牙は劍の如く口の兩端から出てその忿怒大喝の姿は一喝戰慄恐怖を覺ゆる形相である。

この恐ろしき形相は如何なる意思の表示なりやと言へば、身體の青黒なるは大慈悲の表示、背後の火焰は大智慧、右手三鈷を以て天を衝くは天魔粉碎、右足は天地間の妖魔を蹴散らすの意、左足は地下の魔性を踏み碎く心、左手の劍印は一切の凡情迷昧を裁斷する利劍となるので、一舉一動惡魔降伏の姿勢ならざるはなく、しかもその根本の精神は大乘的大慈悲の表現像たるのである。

而してこの尊姿は之を金剛藏王といふ、即ち金剛不壞の大勇猛心の發現である。

小角はこの御佛を感得して狂喜した。即ち小角は多年の苦修練行により体得したる精神が佛体を通じて宣言せられ自己の理想を佛体化したことになるからである。かくして小角は自己が創始し普及せんとする宗義の本尊を得たのである。

さて小角が衆生濟度の手段は經典の詮索や論議に只口先きのみで喧々してゐるやうな魂の入れぬ上代的宗教ではなく、如何なる人にも眞剣に苦修の体験を強ふるのであるが、これが實踐躬行の結果は何人にも雖も生存のまゝで佛となり得ることを高唱するのである。換言すれば即身即佛を教へ一意之をを目指すのである。

然り、而して修驗道に於ては蓮花咲く彼方に到達せんが爲には、本尊たる藏王權現の表現する大精神を信條とする、即ち惡魔降伏こそ、その目標であるのである。而してその惡魔とは何か、妖怪變化か、あらず、惰弱、偷安、不信、虚偽その他すべての不正不義がそれなのである。

人は必ずこれ等の恐るべき妖魔を打倒せなければならぬ、もしも意氣阻喪してこの大敵に破れんか、即ち奈落轉倒の一途あるのみにて人生の行路忽ち閉づるは

明白の事である。

然るにも、藏王權現の大表示に従つて金剛不壞の大勇猛心を揮ひ起し敢然として戦ひ之を克服するに於ては人生の進路自ら拓け光明輝く燦然たる境域に達するはこれ必至の事である。然り而してこの光輝ある境地こそは人生成効の境涯で、これ即ち紫雲榭曳く極樂であり、修驗道の究極として目指す即身即佛の現實に外ならないのである。

實に然り、されば修驗道の教義は決して難解のものに非ず、小學校にて教ゆる苦は樂の種、努力は成功の母なる眞理を理想として之を實行せんとするものである。只併し乍らその實行に當つては單に之を信念の力に頼るの危険なるを慮つて宗義の力、即ち信仰の法力によらしめんとするのである。而して其の實現の手段として十界の修行を強要する。さり乍らこの十界の修行の道程における言語に絶する苦行や、また、精神淨化の情操修練も、やがて法悦となつて益々確固不動の大精神を把握せしむることとなるのである。然らばその十界の修行とは何か、次に之を説かん。

一、地獄道の苦行。八寒八熱に苦しむ地獄の世界で

は先達の命令に依つて、ごんな厭な事でも苦しい事でも丁度機械の様に、苦力のやうに、それは雑用の人夫として働かなければならない、これが長い道中續くのだ。

二、餓鬼道の苦行。先達の命令に疲れた身体をもて餘して居るのに、新たな命令によつて、斷食、斷水をする。

三、畜生道の苦行。腹はへこく、身体は疲勞し、おまけにお山は益々險難を加へるに拘らず、先達は更に嚴命を下して、法具やその他重い荷物を持たされる、さながら、牛馬の様な階行である。

四、修羅道の苦行。空腹、疲勞、重荷、險難等數々の苦しみであるが、せめて緩々登つたり。休息したり出来るさよいのだが、そんな生温い事は絶對禁物、人に遅れぬやう、人を排して先頭を争ふ、或はまた棒の振ち合等の苦行をする。

五、人間道の苦行。以上四界の苦行を経て、初めて人間界に出られるのである。即ち人間となるには以上の苦難を以てせなければならぬ事を理論

ではなく、体験によつて覺らしめる。さて今までは、只苦しい事のみで他を顧る心が起らなかつたが、人間界に入つて初めて先非を悔ひ、懺悔の心が湧く。懺悔して六根清淨となり、心の奥から先達の前で既往一切の罪業を告白して悔い改めるのである。白雲脚下に湧く千仞の斷崖の上に突き出されて懺悔をさせられ、將來を盟はされるのである。

六、天道の苦行。懺悔せば罪は消えて六根清淨となるので、次は天道界に入つた事になる。今迄は肉眼で佛は見えても精神的には佛との間に隔りがあつて、心の對面が出来なかつた。しかし懺悔のため隔りがされて、初めて佛に對面する資格が出来る。

天道界では三千佛(過去、未來、現在各一千佛)の御名を稱へて拜禮をする。一佛の御名を稱へては額づいて一禮拜する。記録によると、これがため膝頭の皮がむけて血が出たさあるそうである。決して易行ではなく苦行である。

七、聲聞道の行。以上六凡の行を終つて四聖に入

る。聲聞の道は諸々の聲を聞いて悟を開くの謂である。水の流るゝ音を聞いて不撓不屈の心を養ひ、松吹く風の音を聞いて無常を感じ、鳥の音を聞いて心か和らげ、峰の嵐を聞いて緊張する、或は又法の聲を聞いて修養する等の類である。

八、縁覺道の行。此處では目に映る諸相を見てする修行である。水の清きを見て、心の清淨を誓ひ、花の笑ふを見て心を高尚にし、山の高く青空に聳ゆるを見て崇高なる精神を養ふ等がそれである。

九、菩薩道の行。以上の諸行が終れば美しい菩薩の行體となる。菩薩即ち佛となつて衆生を濟度する資格が出来る。併し仕事がなくなつた譯ではなく、自己の徳力によつて上求菩提、下化衆生、即ち濁れる衆生を濟度する任務を負ふこととなるのであつて、これも一種の行である。

一〇、妙覺道。前記九界を體驗徹底して漸く妙覺の佛地に入る。此處は言語を超越せる宇宙大真理の存する地域で、即身即佛の境地である、

は到底了解出来るものではない、實に修驗道はこの刹那の安心と喜悅を根基とし之を永遠の理想として練磨するのであつて、この大精神を忘れしめないがために度々の入峯修行を要求するのである。

然り、而して修驗道においてはこの入峯修行による體驗の貴重なる印象を日常の生活の上に、職業の上に、また修養の上に移行せよと強要するのである。

小角が山岳を以て苦修練行の道場とせしは彼の山岳觀の傑出し透徹せる所以である。即ち山は靜者であり、泰然不動不變であり、仁愛の表徴であり、崇嚴の極致である。朝三暮四、心猿意馬に跨つて狂ひ廻る凡情の、その變輕極りなき心に對比して、山は常恒不變不動のものであり、清淨であり、神祕であり、山こそ宇宙の大真理として崇拜すべき靈場たるのである。

更にそれ、修驗の大峯山脈觀に至つては實に次の如く神聖視に徹せりと謂ふべきである。

夫れ當峯は金胎兩部の淨刹、無作本有の曼荼なり。森々たる嶺岳は金剛九會の圓壇、鬱々たる岩洞は胎藏八葉の蓮台なり、山河草木は全く遮那の眞體、嶺風谷響は自ら法身の說法なり、三部の諸

されば神通力をさへ生するのである。

十界の修行の解説は以上の如くである。茲において知る、即ち修驗道の要諦は小兒も之をよく言ひ得て、その實際は五十才の壯年も容易ならざる難行なりと。

さり乍ら凡聖不二の大信念を固め情弱安逸の夢を破り克己安心を固めて、よく十界を頓超するに於ては、神を天國に求めなくとも、亦佛を西方十萬億土の彼方に探さなくとも現世において必ず佛地に立ち得るのである。

然り、而してこの十界修行の體驗を修練する道場は之を山地に撰び、尙その根本道場としてわが大峯山脈を推すのである。

發心以來十界の苦修練行を経て妙覺界たる頂上の佛地に到達し本尊の前に跪座した時の心境は如何、百千の形容詞を以てするも到底表現し能はざる所のものである。刹那に溢るゝ歡喜の情、恍惚たる心境は所謂妙覺の妙覺たる眞體を体得したものであつて、これ即身即佛の境地たるのである。

この至玄至妙の妙覺界は一に自力による苦練によつてのみ得らるゝ、妙味であつて、かの筆や言葉の徒輩に

尊濟々として羅列し、無數の聖者は奇々として安坐し玉ふ。

大峯山脈を尊崇すること誠に此の如く、此處こそ佛神宿り、嶺風谷水も皆般若を談す觀想すべき淨土と仰ぐのである。

か、ればこそ、古來長くも皇室を初め奉り、貴賤貧富をおしなべて、わが大峯山脈を法悅悟入の道場として練行し來つた所以であり、その道心がわが國運の興隆に寄與したる所、實に計り知るべからざるものあるは史を繙けばよく首肯し得らるゝ所である。

識つて考ふるに今や皇國の現状は實に重大である、この秋にあたり我國民性に適應し、之を指導誘掖せんがために樹立せられたる修驗道の大衆下に馳せ參じてその教ふる所に従つて實踐し以て、この身を、この國家をより以上光輝あらむべく努力することが、國民の當然なる更にまた尊き使命なりと信ぜらるゝのである。

(三) 旅程の栞 (一) 自動車—徒歩

一、大峯山脈の縦走及大台ヶ原登山

(イ) 大峯山脈について

大峯山脈とは吉野川畔の六田ムタに起り紀勢和半島の中
央部を縦断して熊野川畔の本宮に落つる蜿蜒数十里の
大きな山脈で、之を北から南に縦走すると、吉野山、
山上ヶ嶽、彌山、釋迦ヶ嶽、笠捨山、玉置山等の山々
を経て本宮に漸降するのである。

この大峯山脈といふ名稱は河東碧梧桐氏が大正二年
之を縦走して雑誌「日本及日本人」にこの名を以てそ
の紀行文を発表したのが初まりであり、それまでは一
般に用ひられる名稱がなかつたのである。

所がよく古文書等を調べて見るにこの山脈は金峯山
と大峯山の二部から成ることが判る。即ち深仙ジンセン(釋迦
ヶ嶽と大日ヶ嶽との鞍部)以南を大峯山といひ北を金
峯山と稱へるのである。

(備考、中には小篠オホナガサ——山上ヶ嶽より二十町以南の

地——を以て兩峯の界となす人もある。それによ
るに小篠以北を金峯、以南を大峯となす)。

されば行者参りて名高い山上ヶ嶽を大峯山と稱へる
のは間違であつて、こは金峯山中の一峯に過ぎぬので
あり、この山に對しては山上ヶ嶽と呼ぶのが正しいこ
さを知らなければならぬのである。

さてこの大峯山脈は近畿地方でこそ高山であるが、
その最高峯たる八經ヶ嶽でさへ海拔六千四百尺に充た
ないのであるから高さを以ては天下に呼號することが
出来ぬ筈である。

然らば如何なる特徴を以て古くより世に尊重され又
近くは國立公園にも指定されたかといふこと、それは極
めて貴重なる史蹟名勝及び天然紀念物を豊富に包蔵せ
るが故に外ならぬ。されば大峯山脈を語るには何を措
いても先づその長所たるこれ等のことを以てせねばな
らぬ次第である。

甲、史蹟

我國における登山の歴史は大峯山脈が最も古い、即
ち千三百年前役ノ小角(大和南葛城郡茅原の生れ)と
いふ人が金峯山(山上ヶ嶽附近)で苦修練行をなし、
その結果山上ヶ嶽で藏王權現を祈り出した、その後更
に熊野の方から大峯山脈に分け入り之を縦走して修行
されたのであるがこれ等のことが山岳宗教修験道の初
まりであつて、この藏王大權現は實に修験道の御本尊
であるのである。

その後二百年ばかり経て大峯山脈の中心である彌山ミセン
といふ山の中腹に大蛇が跳梁し路が絶えた、之を聖賢
理源大師(醍醐寺の開祖)が長くも宇多天皇の勅を奉
じて北方吉野の方より分け入つて大蛇を退治し再び路
を開いた、されば理源大師のこゝを中興の關山といふ
のである。爾來この金峯山と、大峯山即ち大峯山脈は
修験道の靈場となつて上下尊崇の地となつた次第であ
る。

恐れ多いことであるが皇室におかされてもその御
信仰頗る篤くおぼしまし、天智天皇、天武天皇、嵯峨
天皇、仁明天皇、文徳天皇、清和天皇、醍醐天皇、村
上天皇等の天子様が或は御自筆の御經さか、御護さか

或は御劔等を勅使として大峯山脈に御奉納せしめられ
たのである、即ち或は普賢菩薩の嶺に御奉納せしめら
れたさか、或は又般若波羅密の嶺に御奉納せしめられ
た等いふことも尊い御信仰であつてこの勅使は大抵當
代第一流の名僧が撰ばれてゐるのである。而してこれ
等のことは皆記録に精しく載せられてある。

この大峯山脈や、また熊野に對する上下の信仰は平
安朝時代がその最盛期で登山参詣者も夥しい數に上つ
たのである。

恐れ多いことながら宇多法皇は昌泰三年七月(一〇
三八年前)及び延喜五年九月(一〇三三年前)の兩度
金峯山(山上ヶ嶽)に御参詣し給ひ親しく法要を行ひ
五百町歩の水田を御寄進あらせられた、それから寛治
六年(八五〇年前)白河法皇京都を發して金峯山に御
幸あらせ給ふたが、時の天子様は三日間御精進を遊ば
されたといふ事である。

それからまた親王様方も深くこの兩峯を御信仰あら
せられ御修行のため或は御峯入遊ばされたさか、或は
またその際深仙で灌頂をおうけ遊ばされた等いふ尊い
記録がある。

峯入りや宮も草鞋の旅路かな

こは宗因の句でこは真剣な御修行の御有様を最も雄辯に云ひ表してゐると思ふ。

上皇室が既にかくの如くであらせらるるのだから、臣下の歸依も亦頗る盛んであつたのは當然のことであらねばならぬ、中にも最も有名なのは御堂關白藤原道長の金峯山參詣である。

即ち飛ぶ鳥も落す程の勢の道長でさへ更に幸運を祈るために寛弘四年(九三一年前)登山して法華經その他の經函を埋め願文を奉つて祈念したのである、この經函は元祿元年(二五〇年前)山上ヶ嶽の經塚から掘出され、今は吉野山の金峯山寺と吉水神社に保管されてゐる。

その他名高い僧侶達も信仰頗る篤く、かの行基、弘法、良辨、智證、増譽、行尊、西行等の名僧智識もこの山に修行したのである。

茲に記した名僧の中で増譽大僧正といふ方は聖護院の開祖で凡そ八百年前のことであり、また大僧正行尊といふ方は三井寺圓滿院の僧であるが小篠で思ひかけす櫻の咲いてゐるのを見て

もろこもにあはれと思へ山櫻

花より外に知る人もなし

さいふ歌も詠んだので、こは凡そ七百五十年前のことである。この歌は山麓では既に花が散つて若葉の眺めとなつてゐるのに拘らず此處では珍しくも咲いてをた、所が誰も見る人もなく如何にも淋しげに思はれたので、物の憐れを感じて詠まれたこの事である。

西行法師は凡そ七百年あまり前入峯して澤山の歌を詠んでゐるがそれは山家集に見られる。

降つて江戸中期に到り享保十四年(二〇九年前)幕府探薬使の植村左平次政勝といふ人が探薬のためこの大峯山脈や十津川、北山等の地方を跋渉してその採集物を幕府の薬園である駒場の薬園に繁殖せしめて人民の利用厚生のために貢獻せしめた外精しい探薬日誌を遺してゐる。

それから天保年間(凡そ百年前)にはかの有名なる本草學や地理學者である畔田伴存といふ人が、この大峯山脈を初め吉野群山を詳細に實査して地理物産に亘り精しい澤山の處献を遺してゐるが、この記録は現今の大學者が見ても驚き入る程の貴いものである。

史蹟の概要は以上の通りであるが、先人はこの尊い靈地の天然を保護すべく頗る周到なる注意を拂つて來たのである、今その一例を舉ぐれば

一、峯入りの通筋は嶽を用ふることを嚴禁した。聖護院の宮がお通りになる時にも熊笹を開き、その切株を槌にて打ひしげ置いたものである、こは嶽を用ふるに自然山崩れを起す原因となるからである。

二、立木を伐採して道を造る事はなかつた、立木に鈍目を入れて道印としたものである。

三、吉野山より熊野に及ぶ全山脈の峯筋には七十五靡と稱し七十五の靈蹟を在し古來貴賤を問はず參拜苦行せし道場である。またこの七十五靡の兩側へ折掛八町と稱し、左右の谷に向つて幅八町の間は之を特別の靈域としてその天然物は極力之を尊重し蜿蜒數十里の長きに亘つて特に大切に取扱つたものである。

四、この山は肉食禁制なり、これ山中にすむ禽獸魚類を保護するに貢獻する故である。

五、人家を制限した、例へば前鬼(下北山村)の如きは五軒の外、家を増加することを嚴禁して人爲による破壊を免るるため細心の注意を拂つたものである。

六、山中を行くに法螺を思ひた、これは深山の事故猛獸に出逢ふ恐れあり、又道を失ふ恐れあり、猛獸は殊更人を害するものでないから法螺を吹けば潜伏して姿を見せる事なく、自然人に害せざる事がなくこれ動物保存に適したる方法である。

吾々現代人は先人のかうした尊い精神に對し深く省る所がなければならぬ事と思ふ。

大町桂月翁作 大峯山脈

○泉聲頓覺洗心腸 每遇奇觀便舉觴

一陣天風捲雲去 月輝七十五靈場

○欲探靈境訪神仙 樹下巖頭儘熟眠

懷古不堪隨喜淚 御風攀盡佛峰嶺

乙、名 勝

大峯山脈の表理する景觀は千差萬別であるが深林美と岩石美と溪谷美を以てその長所とすのである。

(A) 深林美

山嶽を縦走して左右の脚下に果しなく展開する深林や、またその溪谷を探つて天日を見ざる迄に鬱蒼と繁茂する樹林に接する時はわが大峯山脈を覆ふ森林の壯大さに驚嘆せぬものはないであらう。殊に八經ヶ嶽よ

り涅槃ヶ嶽に到る山脈の西側の原始林と、孔雀ヶ嶽より地藏ヶ嶽に至る東側を覆ふ原始林の壯麗さは特筆すべきものである。なほ見逃すべからざる事はわが吉野群山の原始林は日本アルプス邊のものに比して遙に崇峻味を覺ゆることであり、また、秋季紅葉の美観は形容の言葉を知らないのである。

(B) 岩石美

大峯山脈は到る處に斷崖絶壁をなす巨岩が突立つてをり、その色彩と奇觀は人をして恍惚たらしめるのである。そしてこの巨岩の中には修験道の神身鍛錬場たる尊い道場となつてをるものも少くない。

(C) 溪谷美

吉野群山には幾多の特徴があるが溪谷美こそその最たるものでその美は天下に類例を求むること至難なりとせられてをるのである。而してわが大峯山脈にも無数の幽玄なる溪谷を藏してをるが、中にも上多古谷、旭川谷、彌山谷、前鬼谷、池川谷等は尤中の逸物で、その美は幾多の山岳家を魅了し、常に話題の中心となる有様である。

丙、天然記念物

大峯山脈は數多の貴重なる天然記念物を包藏し以て學術研究上絶好の資料となり昔より世を裨益したること少くない。今次にその主なるものをあげる。

植物の部

×木本類 オホミネシヤクナギの大群生。ナツツバキ。巨大なるクロツル。ミヤマモミヂイチゴ。オホヤマレンゲの大群生。シラベ、タウヒの原始純林。カウヤマキの原始林。イチ井、カヤの野生。
×草本類 オホミネコザクラ。タウキの天生。ヨシノニンジン等。

動物の部

日本猿。カモシカ。ヨシノコマドリ。佛法僧。イワツバメ等。

(ロ) 大台ヶ原山について

大台ヶ原山は勢絶と大和の國境をなす台高山脈の南部に位する一大雄嶽であつて紀勢和の三國に跨り西方西ノ川(北山川支流)の深谷を距てて大峯山脈と相對峙す。

この山はその峯々を結ぶ梁線の東側と北側は急傾の

斜面をなすも西側と南側の方面は凡そ七、八百町歩に及ぶ台地を形成し、その究まる所は中ノ瀧、千石嶺、大蛇嶺等の絶壁を現出するのである。

而してこの大台ヶ原山は三川の水源をなす、即ち東側の水は宮川の源流たる大杉谷となり、北側の水は吉野川に流れ、西側の水は西ノ川(北山川支流)に、また、南側の水は東ノ川(北山川本流)に落下するのである。

山上七、八百町歩の緩傾斜の台地には多くの丘陵や溪流やまた平原を存す。開拓、正木ヶ原、牛石ヶ原等は平原の最たるものにしてこの天上の樂園に憩つて詢鳥や鶯、時鳥その他名も知らぬ小鳥の合奏を聞けば忽ち羽化登仙の心境となる。

また山上を流るる溪流は幽景と謳はる、中にも開拓を縫ふ大和谷、桂谷等の潺々たる谷川は鬱蒼たる原始林の中をせせらいで幽邃なる景觀を現出しギャンパーを狂喜せしむ。

この山はまた眺望にさむ、最高峯秀ヶ嶽の頂や大蛇嶺の岩頭、さては瀧見尾根の眺め等は登山者の忽ち魂を天外に飛す絶景である。

この外特筆すべき事は霧水の大壯觀である、冬季登山して一目數十萬本の落葉樹に宿る霧水が朝暾に燦然と輝く光景は筆舌の形容を超越してをる。

さてこの雄峯大台ヶ原山も宗教の靈山たる大峯山脈の近くに存在し乍ら少しも顧みられず、爲に其登山史に到つては特筆すべきものがなく全く近年までは魔境として恐れられてゐたのである。この山が初めて世に紹介せられたのはかの寛文十一年(一六六六年)嵯春庵周可の著す吉野山嶽案内にある次の文句を以て恐らく最初の文献と見做してよいであらう、但し是れも周可自ら登山しての見聞に非ることは想像に難くない。

吉野川の水を大台ヶ原といふ此所にさもふが淵とてあり よしの川熊野川伊勢宮川三つの水上なり
あたりに藤おひしげり西風吹は藤ヶ枝にて水を東へなびけ宮川へ水出東風吹けばよしの川又北風吹けば熊野川へ水出ることかや さるによりて今も東風吹は晴天にも吉野川へ俄に水出るなり

西行法師

大台やさもふに三つの水上は熊野によしのいせの宮川

巴 淵
淵の鮎やめくるともみがつつかしら、
和州 今井住通信

月かけや巴の淵をぶんまはし
勢州 山田古跡伊人

登山史としては享保六年幕府探薬使野呂元丈外三人の登山を以て最初と見て差支ないであらう。次では寛政初年の頃、南紀の人で南畫の大家たる野呂介石が上られる。降つて天保五年に至り歌人加納諸平は南紀木ノ本の代官仁井田長群（長群は父好古と協力して有名なる續紀伊風土紀を作る）と共に登山してなる、なほ天保年中には畦田伴存（紀藩の人で地理物産の大家として有名なる人）が大台山と北山莊を書いた本を著してなるから恐らくこの人も登山したものであらう。次に、大台ヶ原山の天然記念物として語るべきものは

植物の部（木本類）

ナツツバキ。タウヒの原始純林。ハリモミの天生。
トガサハラ等。

動物の部

日本猿。カモシカ。オホダイサンセウウチ。ヨシノコマドリ。佛法僧。イワツバメ。ホシシリアゲムシ等。

(ハ) 旅程

第一日 出發 大軌吉野線吉野驛下車吉野山へ。(吉野驛前より吉野山入口黒門前まで架空ケーブルあり)
又は吉野線下市口驛下車洞川へ。丹生、川合經由せば洞川まで乗合自動車あり。徒歩道は鳥住、寺戸、米投峠經由(五里) (運賃一圓八十錢)

本夜は旅館、寺院宿坊に命じて案内人や強力の雇人其他必要品の買入をなすこと。黄塵萬丈の都會の地を逃れ來たりたるこの夜は、杜鵑鳴き情趣溢るる吉野山に泊して史蹟を探るか、又は關西の輕井澤と云はるる涼しき洞川に一泊し珍奇の洞窟を探り壯途第一夜の英氣を十分に養ふことは限りなき愉快である。

第二日 吉野山又は洞川發 山上ヶ嶽泊 此距離十二

四軒(六里)十二軒(三里)

山上ヶ嶽には宿坊あり何時でも泊れる。(洞川より強行すれば本日中に彌山に達することもできる)

第三日 山上ヶ嶽發 彌山泊 此距離二十六軒(六里半)
彌山の頂上には參籠所ありて登山者の爲に膳をす

る。
第四日 彌山發 前鬼泊 此距離二十六軒(六里半)

前鬼には天台宗の森本坊、小仲坊ありて何時でも泊れる。本日突鼻に登山する八經ヶ嶽は(八劍や山佛經ヶ嶽は誤り)關西第一の高峯にして、晴天の日は十餘ヶ國の山川を望見することが出來てその壯快な心持は言語に絶する。八經ヶ嶽及孔雀ヶ嶽附近は吉野群山中、オホヤマレンゲの最も繁茂せる所である。(八經ヶ嶽附近のものは政府より天然記念物に指定せらる)。前鬼は釋迦ヶ嶽の東南方中腹に位する緩傾斜の日當りよき桃源郷にして、役の行者が大家山脈修行の際の従者たりし義賢及び義覺の子たる鬼上、鬼繼鬼助、鬼熊、鬼童の末裔の地である。此處では祖先を紀念するため、五鬼上(中の坊)五鬼繼

(森本坊)五鬼助(小仲坊)五鬼熊(行者坊)五鬼童(不動坊)の五姓を續け來りしが、今は森本坊(五鬼繼義孝)と小仲坊(五鬼助義憲)の二坊を存するのみである。

第五日 前鬼發 河合泊 此距離全部にて三十軒(七里半)
前鬼附近には裏行場といひ垂直的の節理に富む石

英斑岩の巖巖聳立する溪間展開し、此處を前鬼川峡谷の清水奔流してなる、而して時には六、七百尺の大飛瀑となり、時には蒼然たる碧潭をなす幽邃なる仙境があり之を裏行場と云ふ、本日未明に起床し、早く裏行場の巡覽を終りて河合に着く。河合は村落にして旅人宿がある。(奈良、大阪等へ電話もかかる)。前鬼を發し、池川峡谷を経て上池原に達する事も出来る。

第六日 河合發 大台ヶ原山泊 此距離二十軒(五里)

途中縣社北山神社并に北山宮御墓(後龜山天皇皇玄孫)に參拜の上逆川、開拓等を経て大台教會着、何時にても泊れる。

第七日 大台ヶ原山上探検

秀ヶ嶽、正木ヶ原、大蛇ヶ原等の絶景を、殊に昨年
新設せる景勝を縫ふハイキングコースを辿つて大蛇
ヶ原より東の瀨を経て瀨見尾根に到り、中ノ瀨と西ノ
瀨が相並んで蟬舘懸崖に落つる大壯觀を見なければ
大台に登つた意義がない。また教會に案内人を依頼
し、如來附、三津河落山、日本鼻、大和岳等、西大
台の諸山を巡れば大台ヶ原山全部がよく判る。また
中ノ瀨附近の懸崖を下りて東の川峽谷に沿ひ大蛇ヶ
直下に到り、天空にそそり立つ大蛇ヶ原を仰ぎ見れば
その壯觀言語に絶する。(但し大蛇ヶ原直下に到るに
は露營を要す)

大台ヶ原山は頂上七百町歩位もある緩傾斜の台地
で、尖頭のように絶頂に登つたら、それで一目
瞭然と云ふ趣が全然ない、されば山頂の見物に必ず
一日を費さなければならぬ。

第八日 大台ヶ原山發 柏木泊 此距離二十六軒(六
里半)

柏木は山紫水明の村落である。柏木に下山の途中
青天井にして野趣溢るる入之波温泉に一浴し、その
湧泉を呑んで胃腸を壯健ならしむることを忘れては

ならぬ、尙又大迫、柏木、北和田邊にある多くの岩
窟を探検する外、柏木の對岸にある金剛寺并に河野
宮御墓(後龜山天皇皇玄孫)に參拜せらるゝ事。
第九日 柏木發 大和上市驛乘車歸着 三十八軒
(九里半) 運賃壹圓五拾錢。徒歩五社峠越 二十六
軒(六里半)

○大台ヶ原山より柏木に下る外、東南三十二軒(八
里)にして紀勢東線尾鷲驛に到り、西南すれば木
ノ本町、新宮市を経て勝浦港に到り、其處から急
行船により神戸大阪に向ふか、又は紀勢中線串本
驛下車、潮岬大島見物後紀勢西線周參見驛に着す
る事もできる。(白濱、湯崎温泉行は白濱口驛よ
りバスあり)勝浦港よりは大阪通ひの急行船那智
丸、牟婁丸に乗り海上より移り行く熊野海岸の絶
景を賞するも實に興味深く、一度甲板に出ると船
室に入る事を忘れる)

○秀ヶ嶽又は大台ヶ原より岐れ大杉峽谷を探りて大杉
部落に出で其處より自動車にて紀勢東線三瀬谷驛
に出る事も出来る。

附 記

一、山上ヶ嶽より彌山に至る途中、行者還ヶ嶽に山

小屋の新設を見たから登山者は大いに便利であ
る、この行者還ヶ嶽より大普賢ヶ嶽附近は石楠
花の繁茂せる所であるから五月下旬より六月上
旬における開花期の見物や、又川追川見物や北
山方面に出でんとするものにまつても大なる福
音である。

一、山上ヶ嶽、前鬼間及大台ヶ原山は動植物の種類
に富む事彼の日光山と共に海内無双と稱せられ
斯學者の驚嘆せらるゝ所である。

一、十月二十日前後大峯山脈の紅葉は宛然錦繪のや
うである。

携帯すべき物品

○自宅より携帯すべきもの

陸地測量部五萬分の一山嶽圖大峯山脈及大台ヶ原山
近傍圖、並に五萬分の一地形圖(尾鷲、十津川)、毛
布、藥品(キズ藥、胃腸藥、風邪藥、アンモニア、
メントレ、繻帶等)、夏手袋、テシマゴザ(横に折
れ得るものがよい)冬シャツ、冬ズボン下、楡笠、
水筒、魔法瓶(毎朝味噌汁を入れ中飯の際飲用すれ

ば此上の御馳走はない)草鞋足袋(豫備)

○吉野山又は洞川にて携帯すべきもの

氷砂糖、キヤラメル、燐寸、金剛杖、案内人兼強力
(ワラジ、ゴザ等は洞辻茶屋にもあり、又ワラジ丈
ならば山上ヶ嶽山頂の宿坊や、行者還ヶ嶽や、彌山
の參籠所にもある)

備 考

案内人兼強力は吉野山又は洞川の寺院宿坊、旅館に
命じて雇入れらるゝがよろしい。其賃金は宿泊料雇
主負担にて日額貳圓五十錢乃至參圓五十錢位です、
案内人及強力共に一人に付四・五貫匁迄の荷物は携
帶せしむることを得るも、これ以上の携帯は山岳峻
嶮のため非常に困難である。尙深山に於て降雨にあ
へば歩行の困難は素より、山岳縦走者を最も喜ばし
む所の眺望の愉快を得る事ができぬから其日は出立
を見合すのがよい。殊に彌山附近に於ては最もこの
感が深い、次に大峯山脈の縦走には是非案内人兼
強力を雇入れ地理その他の説明を聞くことを必要と
するも大台ヶ原登山には之を缺くことも大なる支障が
ない、(大台教會にて聞くことが出来る)故に第六

日以後は解雇するもよろしい。されど此の場合には人夫の自宅に歸着する迄に要する尙二日分の賃錢と一泊分を支拂ふ必要がある。(或は一日分の日當と歸宅に要する自動車賃)

- 一、同行三・四人までならば一人の案内者にて強力を兼用せしむる事ができる。
- 一、深山の夜は丁度晩秋の氣候なる事を思ひ露營の場合は防寒具を携帯せらるゝ事が必要である。
- 一、大日ヶ嶽又は前鬼より嫁越峠を經、大峯筋を縦走して笠捨山へ到り葛川又は浦向へ下られんとする方は當協會へお問合せ下さい。

(二) 後南朝について

吉野と云へばすぐ南朝を想起するが何で知らん、南北兩朝御和合後尙七十九年間の長きにわたり南朝再興の策動が續けられ、しかもそれは主として吉野熊野の天地を舞台として演ぜられたものである。而してその何れもが悲史の連續を以て終始する、中にも後南朝の御事蹟はその歴卷であつて涙なくして之を語り之を聞く

ことは出来ない。

この國立公園を訪ふものは後醍醐天皇より尙御七代の後までもその皇統が天皇の悲壯なる御遺言を遵守し回天の大業を致さんとして事志と違ひ血涙を以て閉ぢた後南朝の史蹟を弔さんことを切望して止まない、今次にその大要を記して御参考となさむ。

元中九年南北朝御和合後においても尙吉野朝を再興せしめんとする運動は七十九年間も續けられたのであるが、所謂後南朝とは皇統が奥吉野の峽谷に在した嘉吉三年より長祿元年に到る十四年間を指すのである。さて嘉吉三年八月二十三日(四九四年前で御和合後五十一年目)吉野朝の遺臣等は皇胤を奉じて土御門内裏を襲ひ神璽を奪ひ奉り吉野の奥に潜入しこの天險によつた、然るに事志と違ひ長祿元年十二月(四百八十年前で御和合後六十五年目)兩宮(後龜山天皇の皇孫で北山宮と河野宮の御兄弟)がこの深山で悲しくも御落命遊ばされたのであるが、自ら正統の朝廷と御宣明し給ふたのであつた。奥吉野に入り給ふや、初めは川上ノ莊三ノ公に在し一ノ宮を南帝の位に即かせ給ひて自天王と稱した。(二ノ宮を忠義王といふ)父王薨

去後侍臣八庄司公文の伊藤、加藤等相謀つて自天王を北山莊小瀬に移し奉つた。

これより先嘉吉元年六月(四九六年前)赤松満祐は將軍足利義教を詐り殺し領國播州の白旗城によつたが破られて忽ち一家斷絶の憂き目を見た。然るに遺臣中之を慨し主家再興を志す者あり、竊かに三條實量に懇訴し、終に奥吉野に入つて南朝の皇統を絶ち神璽を奪還し享らば赤松家を再興すべしとの約諾を得、上月左近將監を領袖とし康正二年十二月(四百八十一年前)大和宇智郡に集合し入山の機を窺ふ、その内一味の者詐つて兩宮に仕へ機を見て更に一黨を此處に引入たのであつた。

たま／＼長祿元年十二月二日大雪降り、警戒のゆるんだのを幸ひ子の刻を期して一度に北山、川上の兩御座所を襲つたのである。

北山宮(吉野郡上北山村大字小椋)の方は丹生屋帶刀左衛門、全弟四郎左衛門にて討奉り御首級と神璽を奉じて伯母峯をこえ伯母谷(吉野郡川上村)まで遁走し大雪にて滯留中變を聞いた八庄司公文の伊藤加藤等の一族、また北山の桂庄司その他近郷土民相集まり丹

生屋兄弟を討取り積雪中にかくした御首級は神璽と共に奪還した。

一方御弟河野宮の在す川上莊の御座所を襲つた間島太郎は宮の御衣をひき奉り上月左近將監が兇刃を揮ひ中村彈正が御首級を奉じて逸走した。然るにこれも亦土民に追はれ寺尾(川上村)において川向ひの塩谷より大西助五郎のために強弓を以て射殺されて御首級は奪還されたのである。

かくて神璽は再びこの奥地にあらせられたが一黨の輕輩小寺藤兵衛なるものの謀計によつて郷民を欺き長祿二年八月晦日漸く内裏に奉還されたのである。即ちこの間三種の神器の一たる神璽は吉野の山奥に在らせられたのであつた。

かくて後南朝の遺跡神ノ谷金剛寺(川上村)の御墓所に對して明治十五年宮内省より後龜山天皇皇曾孫尊秀王御墓と御治定なつたが、その後明治四十五年一月二十九日に到り上北山村小椋にある御墓所に對して後龜山天皇皇曾孫北山宮、又神ノ谷の御墓所に對しては後龜山天皇皇曾孫河野宮と御治定になつた。

因に川上村にては毎年二月五日(御兄宮の御即位の

日と傳へらるる日)お朝拜式を三ヶ所にて舉行する。こは宮の御着用と傳へらるる御武具を左の三方に分つて保管してゐるので當日はそれを祀つて禮拜の式を行ひ御冥福を祈り奉るのである。而してその式を司るものは筋目のものに限られるのであつてこは當年戦功を立てたものの後胤と信じられてゐる。

○兜一領を保管する地方を七保ヒチホといひ九ヶ大字を有す。

○大袖一雙を保管する地方を四保ヨッポといひ五ヶ大字を有す。

○胴丸打刀薙刀各一を保管する地方を六保ロクホといひ九ヶ大字を有す。

(かく三方に分つて保管するは當年の伊藤、加藤東、正下等の一族が戦功の印とし又宮をお墓ひ申すべく各々の居住地方に分管するに到つたものでその保管とお朝拜の式は三方ともその所屬大字の廻り持である。)

二、山上ヶ嶽登山

『藏王権現』と『役ノ小角』を祀り修験道の根本道場

として年々十數萬の参拜者を迎ふる當山上ヶ嶽のみならず土曜日の午後出發翌日曜日歸着、極めて簡單にできる。(事變以後武運長久祈願の参拜者夥しい)

第一日 出發 大軌吉野線吉野驛下車 又は吉野線下市口驛下車 吉野山又は洞川ドウガハ着泊(下市口洞川間は必ず自動車によること)

○この夜は吉野山又は洞川の旅館、寺院宿坊に命じて携帯品の買入をなす事、この登山には案内人の必要がない。

○山上ヶ嶽頂上の宿坊で宿泊し盛夏の候丹前を着て炭火を圍む冬の生活を味ふのも中々面白い。

(山上ヶ嶽頂上宿坊に泊するには遅くとも午後四時迄に洞川に着し、それより洞辻茶屋に急ぎ、其處より案内人を依頼して宿坊に行くを可せず、山より京阪や大和紀州一部の夜光が見えて實に美しい、又航空燈の明滅が人目を引く。)

第二日 吉野山又は洞川發 山上ヶ嶽登山の上 洞川又は吉野山を経て歸着(洞川下市口間は必ず自動車によること)

○吉野山から登れば洞川へ、洞川から登れば吉野山

へ下らるゝ事、この行程三十六軒。(九里)

○又山上ヶ嶽から小篠オノノを経て柏木又は山葵谷へ下るも可。山上ヶ嶽柏木間十四軒(三里半)。全山葵谷間八軒(二里)。(山葵谷又は柏木より大和上市驛までは必ず自動車による事)

○山上には修験道信者が苦修練行の表及裏の行場がある、一般登山者も修行して神身の鍛練をなすことが意義深い。

○五萬分ノ一山嶽圖大峯山脈及大台ヶ原山近傍圖又は五萬分ノ一地形圖吉野山、山上ヶ嶽携帶の事。

三、大台ヶ原登山

第一日 出發 大軌吉野線大和上市驛下車 大和上市驛——新子——柏木着泊。

○大和上市驛柏木間乗合自動車壹圓五拾錢。五社峠越二十六軒(六里半)、自動車道は廿八軒(九里半)。

○柏木着後對岸にある河野宮(後龜山天皇皇玄孫)の御墓に参拜をなし又柏木、大迫、北和田邊にある奇々妙々驚嘆すべき多數の洞窟に入りて地底の秘

寫を探らるる事。

第二日 柏木——入之波——大台ヶ原山教會着泊、自動車賃四拾錢。八軒弱(二里弱)、徒歩二十軒(五里)

第三日 大台ヶ原山上諸名勝見物の上教會泊。(大台開發の恩人松浦武四郎分骨碑にも参拜のこと)

○教會より居乍らして、夕陽に染る大峯山脈の偉容を眺める事が出する、大台ヶ原山には、コマドリコマドリの棲息頗る多く浴ぶるほどその聲をきく事が出来る。

○尙一泊の上翌日案内人を雇ひ次のコースにより西大台を探らるゝことを切に希望する。

教會——如來附——三津河落山——日本鼻——大和岳——經ヶ峰——經塔石——山葵谷——開拓——逆峠(サカサマ峠)——木和田——河合——柏木——大和上市驛

第四日 大台ヶ原山教會——入之波——柏木——新子 大和上市驛。自動車賃一圓九十錢、四十四軒(十一里)、徒歩二十軒(五里)。

○歸途大瀧にて自動車を捨て龍泉寺參拜の上閑靜なる全寺に一泊。翌日間道を吉野山の最奥根ヶ峰に出で、深縁に埋まる吉野山の史蹟を奥より口へ逆に探りつゝ、吉野驛へ出づることをおすゝめしたる。

備考

○五萬分ノ一山嶽圖大峯山脈及大台ヶ原山近傍圖又は五萬分ノ一地形圖吉野山、山上ヶ嶽、大台ヶ原山、尾鷲携帶の事。

○案内兼強力は一日金貳圓乃至參圓位(食費雇主持)大軌吉野線事務所(大和上市驛横)又は柏木又は入之波にて雇入の事。(但し案内人を缺く場合は柏木及入之波にて十分地理を聞く事を忘れてはならぬ。)

○京阪神を早朝發、大和上市驛に午前九時頃迄に着し、自動車をして入之波へ午前十一時過頃迄に着すればその日の中に大台教會へ達する事を得。

四、山上ヶ嶽より大台ヶ原山に到る最良のコース

大台ヶ原山より山上ヶ嶽に向ふ場合は河合着と共に、明朝西原より笹ノ窟迄案内者準備方を旅館に命じて、旅館より西原へ通知方の取計をなすことを忘れてはならぬ。

第二日 河合——北山神社——北山宮御墓——木和田

——逆峠——大台教會着泊。十八軒(四里半)

○携帶地圖五萬分ノ一山嶽圖大峯山脈及大台ヶ原山近傍圖。

附記

大普賢嶽より笹ノ窟に到りそれより最近新設せる山道を経て泊母ヶ峯峠に出で峯筋を辿る細徑を傳ふて經塔石に到り大台教會に行くことも出来る。山上ヶ嶽大台ヶ原山間二十八軒(七里)

五、東吉野北山地方より靜八丁熊野方面の探勝

第一日 出發 大軌吉野線大和上市驛下車

大和上市驛——新子——柏木——北山口——泊母ヶ

峯峠——今西茶屋——西原——河合——上池原——

第一日 山上ヶ嶽——小篠——大普賢ヶ嶽——石ノ鼻
——西原——河合着泊。徒歩二十二軒(五里半)、
自動車八拾錢、十二軒(三里)

○笹ノ窟よりは天ヶ瀨橋(縣道と合する地点)に通ずる新道を探り途中底無しの井戸、無双の窟等を見物する事。(和佐又山を經る細道は急峻なるに加へて名勝なし)

○天ヶ瀨には故松浦武四郎翁が吉野群山を開發せんとして登山せし時の宿たりし弓場龜一家及岩本巖家その儘に残る外多數の筆蹟を存す。

○底無しの井戸、無双の窟は案内人無しでは見物出來ざる故豫め左記へ照會しおき時間を指定して笹の窟まで出迎を求めおく事。山上ヶ嶽、笹ノ窟間大要三時間半。出迎案内賃金壹圓五拾錢。出迎案内兼強力金貳圓五拾錢。(岩屋見物用ローソク一本に付金貳錢)無双の窟は奇妙を極め、人を驚かす。

吉野郡上北山村大字西原 上北山村保勝會西原支部(電報は別便)

池峯——浦向——小口着泊。又は小口——土場——

大又川と北山川合流点——神之上着泊。

自動車賃五圓八拾錢、百〇六軒。(二十六里半)。

神ノ上泊の場合徒歩八軒(二里)。

○吉野川と北山川の分水嶺なる泊母ヶ峯峠より四方を見る壯觀は驚かぬ人がない。

○沿道は北山川の絶景に沿ふて居る。巨岩に激する清流に鳴く玉をころばす様な河鹿の妙音は旅人を恍惚たらしめるのである。

○池峯にて明神池の神秘に接し池神社に參拜せらるる事、この池峯は北山川の水面を抜く事直立約三百米(凡千尺)の高台に在る山中に珍らしい平原地であつて、その入口には周圍四軒弱(一里弱)に及ぶ天然の大池——小湖水——がある。満々に満ふる水は紺碧に澄み渡り、空行く雲の影を周圍に時つ山の姿を倒に寫す瑠璃の鏡面には何さなく凄愴の感じがする。池畔に一際高く繁る老杉塊の下に鎮座する池神社に參拜せらるゝこと。

○上池原にて自動車を捨て北山川左岸添ひに小口に行くも面白い。八軒(二里)強。

○小口には簡単な旅館が二軒ある。(小口旅館、東屋)

○土場より大又川に添ひ本流との出合に到り、其處で大又川を徒渉して本氣の左岸に渡り、それより川原や巨岩を傳ふて神の上に達すること。(旅館大正館、徳村屋)

○小口にて木の本行乗合自動車に乗り桃崎下車。湯屋、大井谷峠を経て大井谷に到り、(但し陸測五萬大井谷の文字より少し北方に達す、此處に一軒家森田庄之助あり)大井谷の流れの右岸の細徑に添うて北山川に出づ、それより北山川の左岸を傳ふて神の上へ行くのもよい。(桃崎と森田庄之助家間は道路廣きも大井谷添ひは細徑にして徒渉の個所もあり)

○土場に井奥賢藏といふ清楚な家あり、依頼すれば泊めて呉れる。

○大和上市驛午前八時五十分發の北山連絡乗合自動車に乗れば午後三時過頃に小口に着す、それより木ノ本行乗合自動車に移乗し土場下車、徒歩大又川及北山川に添ひ神の上に達することが出来る。

○豫め神の上奥村禮三(三〇頁参照)に打電し、午後時頃迄に川舟を小口に溯江せしめおき、それに乗つて神の上へ下るもよい。

○大和上市驛より貸切自動車を飛ばせば河合より横道して小椋に到り縣社北山神社并に北山宮御墓(後龜山天皇皇支孫)に參拜せらるる事、この時間凡そ三十分

○小口泊の場合は到着に全時に杉本周二郎(三〇頁及三二頁参照)に交渉し翌朝川舟又は筏で下るもよい。

第二日

小口——土場——大又川と北山川合流点——神ノ上——七色——竹原——大沼着泊。徒歩十六軒(四里)神ノ上發の場合は本日中午に瀨八丁に達することが出来る。徒歩二十軒。(五里)

○土場より大又川の右岸に添ひ、本流との出合に到り、其處で大又川を徒渉して北山川の左岸に渡り、それより川原や巨岩を傳ふて神ノ上に達し、渡舟で對岸七色に渡り、以後は右岸に添ひ、大沼に到る。

○北山峽(北山川中流にして小口から玉置口迄を云

ふ)の山水美の優秀なる事は言語の形容を超越し實に海内無双の河川美なりと確信せらる、而してこの眞價を知らんせば只現實に付て之を見る以外絶對にその方法がないのである、今仮りに如何なる形容詞を羅列することも到底その眞價を表現することが出来ないのである。

天下に鳴る瀨八丁は海外に誇るべき帝國の勝景たるには相違なきも、こは北山峽大風景の序幕である、世人もし單に瀨の美を知りたるのみにして有頂天化せんか、それは全く笑止の至りである、而して瀨峽の美は以奥の山水を知る事によりて一層その光を放ち、又以奥の大自然は瀨を併せて茲に山水美の王座を確保する事となるのである。

○小口より瀨八丁を経て新宮に到る八十軒(二十里)の長きに亘る舟下りも、眼底に映する四邊の風景は、時々刻々變化して飽くことを知らないのである。全國には河川多く従つて勝れたる山水美を見ることは決して少なくはないが、それは單に短き一局部の優に過ぎないので、北山川と、その下流熊野川とに見るが如き變化多き大風景は決して外に

その比を見ない。即ち北山峽とその下流こそは我國第一の河川美である。

○北山峽の大風景中殊に勝れて絶佳なるものを上流より列舉せば七色瀨附近、七色瀨、相須ヶ瀨(以上大沼迄)、一ノ瀨、神護、音法、黒淵(俗にオトノリノシリと云ふ)、上瀨、下瀨、上瀨、下瀨等である。但しこの北山峽は河川美にして峽谷美ではない。

○大沼にて北山村役場訪問探勝記念スタンプを受くこと。

○小口からすぐ木ノ本町に行かんには乗合自動車がある。(運賃一圓五拾錢)

○午前八時五十分大和上市驛前發北山連絡の乗合自動車に乗ればその日の中に木ノ本を経て新宮に連絡す。

第三日

大沼——小瀨——シゴ坂峠——下瀨(小松)——以下川舟で——田戸(瀨八丁)着泊。徒歩十軒(二里半)

○シゴ坂峠を下りて川畔に着せし所が神護の勝にして順次音法、黒淵の景となる。而して一ノ瀨より

黒淵迄の溪谷は實に北山峡中、瀨八丁以奥に展開する諸景中の覇者たるのである。本日通過の細徑は水邊を稍高く離れ山腹を縫へるを以て、此の邊通過の節は必ず水邊の累々たる巨岩の上に来りて大山水を十分賞美する事を忘れてはならん。尙出來得べくば小松より川舟を溯江せしめて兩岸斷崖絶壁相連り、底知れぬ黒淵の碧潭上に來らしめんか、魂忽ち天外に飛んで身の存在をすら忘れしめるであらう。

○和田の西北(五萬分一地形圖参照)に於て北山川が大屈曲せる所あり、本日通過の細徑は屈曲部の上流の邊よりは川と全く離れて、此屈曲部の最短區間を横斷してその下流に通じてなる、(此處をオソゴエ峠といふ)。而して横斷して出た所の杉林の中に一軒の茶店(屋敷義雄氏)あり、田所(瀨八丁)行の川舟は此處に依頼の事、此處(下瀧)で乗船せば上瀧(瀨八丁)は上瀧、下瀧の二つに分る)を流れて田戸に着くのである。

○大沼より下瀧まで北山川右岸に添ひし細徑も、下瀧から下流は川に添はず山に登る故、田戸行は是

非共下瀧より川舟に乗らなければならぬ、而して本日川舟にて上瀧を下らば再び瀨より舟を溯江せしめて上瀧を見る必要がないのである。

○小口より大沼迄荷持兼案内人夫金貳圓、大沼より下瀧まで全壹圓五拾錢。

○小口から瀨までの間は一日に強行出來ぬ事もないがそれは非常に難儀であり、又この大絶景を素通りする如き事は全く無意義である、されば大沼と田戸では何れも泊らなければならん。

○瀨八丁からプロペラ船(上り二圓七十錢、下り二圓三十錢、往復四圓五十錢)ですぐ新宮に下る外北山川と熊野川の合流点宮井から熊野川を溯江して本宮に到り、湯の峯温泉に行くのもよく、又プロペラ船の終点たる折立邊に到り十津川郷の山水に接するの興味が深い。(湯ノ峯温泉から田邊に出る乗合自動車もある、この街道は中邊路と云ひ中世御幸の街道である。)

○瀨八丁より川舟、又はプロペラ船にて小川口に到り、それより乗合自動車にて阿田和を経て新宮又は木ノ本に出る事も出来る。

(川舟は南牟婁郡入鹿村字小川口、鮎田純吉へ申込出迎 六圓 六人乗)

○熊野川の壯麗なる兩岸の景を眺め乍ら川を下るのは實に壯快である。

○新宮木ノ本間七里御濱の松原及木ノ本町東端鬼ヶ城の豪壯なる海岸美は中々立派なものであり是非自動車を飛ばして一見する事を忘れてはならん。

○紀勢中線沿線海岸の風景は中々よい。

○勝浦海岸狼煙山外方直下の大岩壁の威壓的景觀は我國第一の海岸美なりと臨水、田村兩博士等の嘆賞措かざる大風景である。

○大地岬一帯の秀景及び浦神外洋壁の變化多くして怪奇なる海岸美は必ず探る事、而して大地へ行くには勝浦より巡航船の便あり。浦神へは勝浦又は大地より汽車便あり。(浦神にては郵便局長西政士氏を訪ね舟並に案内人を依頼する事)

○串本にて橋杭岩、潮岬の豪景を見た上、大島に渡り檜野浦(大島海金剛)の大奇景及檜野崎の土耳古軍艦遭難地を視察する事を必ずプランより脱してはならん。

○那智山行紀勢中線那智驛より乗合自動車がある。又自動車にて那智山の奥ノ院たる妙法山に到りそれより頂上橋山に登らんか、熊野浦一帯の大海岸美双降に映じ天下の快事を一身に集めたような心持となる。

○五萬分ノ一山嶽圖大峯山脈及大台ヶ原山近傍圖並に五萬分ノ一地形圖十津川、木ノ本、新宮、那智携帶のこと。

北山峡を川舟にて探勝する場合

北山峡の大絶景の探勝は徒歩による外川舟を下らすことも出来る、但し途中恐るべき急瀧の數多く存在するため合計四ヶ所(三ヶ所徒歩を要す)舟を乗り繼がなければならぬ、またそれがため延四軒(一里)ばかりの間、川原や岩壁を歩行せなければならぬ、併し乍ら全部徒歩によるよりは遙に樂なのみならず、探勝は最も完全に出来るのである。

而してその川舟は豫め左記の箇所へ申込んでおかなければ突然行つても間に合はぬ。

北山峽探勝の川舟雇入申込場所及び運賃一覽表

舟下シノ區間	區間ノ地名	次ノ乗船場所迄ノ徒歩距離	徒歩區間ノ五萬分一地形圖上ノ位置	川舟雇入申込所及氏名	道賃
第一區間	小口——七色瀧間	約一軒弱 (約八町)	(木ノ本ト十津川)ノ 繼目ノ所ニ渡船場アリ、 心トスル上流ト下流ト ノ間約一軒(七色瀧ノ ノ頭ヨリ七色瀧ノ初 リマテ)	(正午迄ニ小口乗船ノ場合) 奈良縣吉野郡下北山村大 字下桑原小字小口 杉本周二郎 (別使電報) (正午以後小口乗船ノ場合) 三重縣南牟婁郡神川村大 字神ノ上 奥村禮三	八圓
第二區間	七色瀧——一ノ瀧間	約二軒 (約十七町)	(十津川)一ノ瀧ノ瀧ノ 下流ノ西端ヨリ初マ リ下流ノ大屈曲点(瀧ノ 一軒ノ所)ニテ渡船 ニヨリ右岸ニ渡リタ ル所ニアル岩壁ヲ傳 ヒ終リテ其處ヨリ巨 岩ノ壘タル難徑ヲ 踏ンテ數字(約)ニ ノ字ノ邊ヨリ細邊ニ 登リソレヨリ細邊ニ 西南行シテ黒瀧ノ ノ字ノ西北方約五 (右岸)邊ノ所マテ	和歌山縣東牟婁郡 北山村大字大沼 北山村役場 北山村役場 (大沼局ハ本年三月末ヨ リ電信電話開通)	但シ大沼ヨリ 上流ノミノ場 合 五圓 下流ノミノ場 合 五圓

第三區間	音法——上瀧間	約一軒 (約八町)	(十津川)上瀧ノ瀧ノ 邊ヨリ初マリ小松ノ 小ノ字ノ東南方約六 ノ字ノ所マテ(何レ モ左岸)	三重縣南牟婁郡西山村 大字和田 橋爪留二郎 又ハ和歌山縣東牟婁郡 北山村大字小松 仲村清彦 (何レモ別使電報) (第三、第四區間共通)	第三、第四區 間ヲ併セテ 八圓 宿泊ヲ要スル 場合拾圓
第四區間	上瀧ヨリ ○五軒——田戸間 下流ノ處				

備考

- 下瀧とは、黒瀧の終り北山峽の大屈曲せる緩れ部分の下流の方に當る。
- 第四區間に於ては田戸着が遅いためにその日の中に舟を小松又は和田まで引き上げられない場合、舟夫は宿泊を要す。
- 舟は一艘に付乗客七人。
- 川舟の運賃は次の區間の乗込場所まで荷物の運賃を含む。
- 以下は仲村清彦又は橋爪留二郎へ申込のこゝ。
- 音法から下瀧迄一艘六圓和田又は小松から田戸迄一艘五圓、下瀧から田戸迄一艘四圓八拾錢。

(何れも田戸泊の場合は參閱増し)

乗船通知の方法

- 一、手紙の場合
川舟乗用の場合は豫め日、時間及乗船人員を通知して指定の日時に川舟を待たしめておかなければならぬ。
- 二、電報の場合
第一區間 ○ヒ○シコグチカラ○ニンノル、 依頼者の姓
第二區間 ○ヒ○シナナイロカラ○ニンノル、 依頼者の姓
第三區間及第四區間

○ヒ○シオトノリカラ○ニンノル、依頼者の姓
 (舟夫は激流を溯江して依頼者の乗込を待つものな
 れば、一度依頼したる者は違約せざるよう注意する
 は絶対緊要のことにして、もし病氣等のため乗込出
 來得ざる場合は夫々所定の運賃を郵送して紳士的態
 度を探られんことを希望します)

所要時間

- 一、小口より乗船して第二區間の乗込場所まで着する
 時間は約二時間弱。
- 二、七色瀬より乗船して一ノ瀧にて下船し音法の乗船
 地点まで徒歩して到着する時間約四時間。
- 三、音法より乗船して途中一ヶ所徒歩し次の船に移り

田戸迄到着する時間約二時間半。

北山峽を筏で下る場合

小口から瀧八丁へ筏で下ることも出来る、筏に乗れ
 ばスポーツ的快味を満喫出来るが時に危険を伴ふこ
 もあるから、十分慎重でなければならぬ(但し小口よ
 り七色瀧の肩まで及七色瀬より一ノ瀧までは大抵安全
 である)筏に乗らんせば豫め左の所へ申込まなけれ
 ばならん、さすれば筏師は乗用に適する様適當の工作
 をなして安全を計つてくれる(筏は川舟の場合に比し
 その二割方位多くの時間を要す)

區間名	申込所氏名	便乗料	備考
第一區間 小口ヨリ七色 瀧ノ肩マテ	奈良縣吉野郡下北山村 大字下桑原小学小口 杉本周二郎	一圓三十錢 (七人以上割引)	豫め手紙又ハ電報ヲ以テ申込置カカ 又ハ小口着ト共ニ申込ムコト
第二區間 七色瀧ヨリ大 沼マテ	和歌山縣東牟婁郡 北山村役場	五十錢	七色瀧ヲ乘リ下ルコトハ危険ニ付一ノ 肩テ上陸シ、七色瀬テ再乗シ、七色 筏検査所下テ又上陸ス、ココヨリ大 沼マテハ筏夫モ筏モ變更ス。 (但シ筏ニ限リ同ジモノニ再乗 レルコトモアリ)

第三區間 大沼ヨリ田戸 マテ	和歌山縣東牟婁郡 北山村役場	二	四
----------------------	-------------------	---	---

備考

○朝小口を出る筏夫は七色筏検査所下(七色瀬の
 終りの處で大沼の筏夫に之を引渡す、引繼げる
 大沼の筏夫は大沼まで之を下し、その下流は翌
 日降り下るのである、従つて便乗者は朝小口を
 出るもその日は大沼泊となる。

各便乗場所を筏が出る時間

○小口午前五時頃より十時頃迄、七色筏検査所下
 午前十時頃より午後三時頃迄。大沼午前五時頃
 より七時頃迄。(但し別誂の筏は依頼者が指定
 の時間に乘れるが、こは前掲の料金とは別物で
 あるのみならず時間の如何により筏夫が宿泊を
 要することもなる。

○小口より田戸まで、又神の上より田戸まで、一
 日中に筏を乗り下らんとする場合は豫めその旨
 を前者は杉本周二郎と北山村役場へ、後者は北

山村役場へ申込おき返事をまつておかなければ
 ならん。但しこの場合の料金は其都度交渉する
 而してこの場合は筏夫が田戸に宿泊を要し、又
 翌日の日當も要することもなり運賃は高價とな
 る。

○徒歩區間を上陸せずして、小口より田戸まで氣
 に乗下ることは危険を伴ふ恐れある故十分慎重
 にやらなければならん。(但しこの場合も便乗
 料は同一なり)

○人を便乗せしむる爲の工作は六、七人迄の場合
 は凡そ二時間を要す。

○便乗せんとする場合、五、六人迄の場合は左によ
 り申込をなす。

△第一區間。豫め手紙又は電報を以て、又は小
 口着と共に、

△第二區間。豫め手紙又は電報、電話を以て、

△第三區間。豫め手紙及び電報又は電話を以て
又は大沼着と共に、

○五、六人以上の場合は必ず手紙又は電報を以て
申込み返事をまつておくこと。

○激流の肩で上陸すると、次に乗る場所で筏を待
たしておいて乗るのである。

○大沼を午前六時頃出る、田戸發正午のプロペ
ラ船に乗り新宮又は本宮に行ける。

六、西吉野大塔、十津川地方より 瀨八丁熊野方面の探勝

第一日 出發 省線湊町驛乗車、又は大軌、大鐵電車
吉野口驛乗替、又は南海電車高野線橋本驛乗替、省
線五條驛下車

五條驛——和田——富貴辻峠——阪本——辻堂——
上野地——川津——風屋——山崎——(川舟)——湯泉地
温泉着泊。

又は山崎——池穴——小井——湯ノ原——湯泉地温
泉着泊。

自動車賃四圓拾錢、七十二軒(十八里)。川舟七十

錢、(二里)

○大塔村や十津川の雄大なる山川は旅行者を喜ばす
事大であり、又卓越せるその史蹟には肅然たらざ
るを得ぬ。

○湯泉地温泉は十津川の左岸に湧出する天然の熱泉
(硫黄及アルカリ)にして浴槽に浸りて周曲の幽
邃なる山水を眺め得られ、その長閑なる心持は山
の湯の感を徹底的に味はしめればおかない。

○山崎より坂路を経て小森所在十津川村役場を訪ひ
それより急坂を下つて湯泉地温泉に行く事も出来
る。

○山崎よりは對岸池穴に渡り、十津川の左岸を経て
湯泉地温泉に行く事も出来る、この道は小森道に
比して景色のよき事夥しく、途中「親の谷」附近
は殊に勝れてよし。

○天辻峠にて天誅組の古戰場を弔ひ又辻堂に下車し
て忠臣竹原八郎や戸野兵衛の墓に参拜するのも意
義深い、但しこの場合は山崎發の乗合舟には乗れ
ない。

○山崎より毎日午後一時に發する平谷行の乗合舟あ

り、(山崎折立間凡そ四時間、折立は乗合プロペ
ラ船の終点なり)乗合舟料金折立迄一圓四十錢、

平谷迄一圓九十五錢

○大阪を早發し、五條發八時十分の山崎行のバスに
乗れば乗合舟に連絡す。

十津川の水量多ければプロペラ船を山崎まで湖江
せしむる事を得。又小原迄ならば大抵何時にても
湖江せしむる事を得、但し此場合は貸切にして

豫め新宮市熊野川飛行艇株式會社へ申込の事。

○途中川津下車、神納川を溯つて、最奥井の岡部落
に到り、此處にて案内人を雇ひ紀和國境山脈を越
へ北方笹の茶屋跡を経て高野山又は上湯川へ、或
は南方龍神温泉に到ることも出来る。

第二日 湯泉地温泉——小原——高瀧——玉置神社——

花折塚——下葛川——田戸(瀨八丁)。

行程二十六軒(六里半)。又は湯泉地温泉——武藏——

ヤケムネ峠(881)——大野——大野川出合——小

川(660)——東中——大渡——田戸、二十八軒(七

里)。

○瀧峠(芦瀨瀧峠)にて護良親王の史蹟に参拜のこ

こ。

○玉置神社の社殿は蒼古を極め社叢をなす天然の大
杉林は森嚴の極である。

○花折塚にて南朝忠臣片岡八郎の墓に参拜の事。

○武藏にて楠正勝の墓に参拜のこ。

○本日より湯泉地温泉を立ち午前七時迄に折立に着けば乗
合プロペラ船に乗ることが出来る。

第三日 瀨八丁見物の上——本宮——湯ノ峯温泉着泊
行程二十八軒(七里)。

(プロペラ船にて北山川を宮井に下り、それより上
りプロペラ船にて本宮に上陸し、自動車にて湯ノ峯
に到ることを得)。宮井湯ノ峯間十二軒(三里)

○瀨八丁上流二十八軒、(小口附近迄の間の溪流)

(五萬分の一地形圖十津川及木ノ本参照)は實に

幽邃極りなき大絶景である、近來奥靜と云ふて類

りに宣傳せらるゝは瀨八丁より小松邊迄間にして

北山峽全体のことではない、されば少くとも小松

以奥黒淵、音法、神護を探らなければならぬ)

(二五—三四頁参照)

第四日 湯ノ峯出發——本宮。プロペラ船にて熊野川

を新宮に下る。徒歩二軒半(二十五町)。

○尙歸途泉量の豊富と風光の絶佳を以て鳴る湯崎又は白濱温泉に一泊して連日の疲勞を醫し附近の風景並に京大臨海實驗所を見學することは誠に意義の多いことである。

○五萬分ノ一地形圖、五條、山上ヶ嶽、釋迦ヶ嶽、十津川、龍神、新宮、那智携帶のこと。

○本宮新宮プロペラ船(上り二圓二十五錢、下り一圓二十錢)(新宮—湊—本宮廻遊六圓)

備考

○飛驒白川ノ庄、肥後五箇ノ庄等と共に桃源郷として知らるる大和十津川郷も、只本コースに依り本流に添ふて下る丈けでは、余りに開發し過ぎおりて、期待したる程の感興を催さない云ふのが本當である、仍て眞に十津川郷の十津川郷たる所以を知り、その眞髓に觸れんことをば支流殊に神納川西川、上湯の川及大塔村の舟の川を最奥の部落まで溯れば、其處に旅行者の好奇心を満足せしめ、憧憬の裏切らざる幾多の珍奇が存在する事を知るであらう。

七、高見登山

この山は勢和の國境に聳立するピラミット型の風爽たる高山にして台高山脈の北端に位し登高をそそること夥しく、つゞじ、しやくなげの名所たる外冬期霧氷の美觀は例ふるに物なし。又山岳初心者に恰好の山なり。

第一日 出發 大軌吉野線大和上市驛下車、又は大軌

電車櫻井驛下車、又は參急電車榛原驛下車、杉谷又は平野泊。(鷺家、木津、平野出合にも旅館あり。)

○大和上市驛より鷺家口經由杉谷又は平野まで三十二軒(八里)、内鷺家口までバスを利用せば徒歩十四軒(三里半)運賃八拾五錢。

○又は櫻井驛から鷺家經由同所まで三十二軒(八里)(杉谷まで乗合自動車あり。運賃壹圓六拾五錢)平野行は平野出合下車、あま約二軒(約二十町徒歩)。

○參宮急行電車榛原驛下車、古市場經由鷺家に行くことも出来る、(バス壹圓四拾錢)

○鷺家口より官幣大社丹生川上神社中社に參拜し、

出づる事も出する。

八、高見山より國見ヶ嶽への縦走

第一日 大軌電車櫻井驛下車 櫻井町—松山町—

古市場—鷺家—木津—杉谷泊。

バス(壹圓六拾五錢)三十二軒(八里)。

○高見山保勝會にて高見登山及台高山脈縦走の焼印を受くること。

○杉谷着の上は區長に依頼して、この登山には是非必要なる案内人(辨當人夫持で貳圓—貳圓五拾錢位)を雇入ること。

第二日 杉谷—高見山中腹國境大峠—台高山脈を

南に縦走し—クモガセ山(一、〇七五米)—

ハンシ山(一、一三二米)—イセ辻山—ウマ

カケバ辻—國見ヶ嶽—西方に下山—大又着

泊。徒歩二十六軒(六里半)

○本日の行程は台高山脈(高見山より大台ヶ原山につづき勢和國境をなす山脈)の北方に位する一部分であるが高見山より國見ヶ嶽の山脈の脊梁は全

後、鳥見靈時傳説地を經て木津に到ることも出来る。

○松山町には有名なる政府指定史蹟の森野舊藥園沿道にあり。

第二日 平野又は杉谷發 高見登山の上、大和上市驛又は櫻井驛に出ること。

○往復同じ道を避け旅行趣味をますため平野より登山せば杉谷に下山し、杉谷より登山せば平野に下山する外乗車驛は往復之を異にするがよろしい。

平野—登山—杉谷—鷺家、十四軒(三里半)

○本旅行には陸地測量部發行五萬分ノ一地形圖(高見山、櫻井、吉野山)を携帶すること。

○高見山保勝會(高見村役場)訪問焼印をうくること。

○平野から東北四軒(一里)の瀧野に行き投石の瀧の涼味に接し、吉野郡と宇陀郡の界をなす才杉峠を越へて曾爾村に達し屏風岩、鐘嶽、兜嶽等を見奇勝香落溪に沿ふて名張に到ることも出来る。

○高見山より東方波瀨に下り八軒(二里)、乗合自動車で櫛田川に添ふて大石に到り電車にて松阪に

部雜草灌木で蔽はれて喬木を欠き、深林を以て成る吉野群山中例外特異の山相を呈しておる、さればその眺望絶佳、縦走中は常に數ヶ國の山川、眼底に映じて痛快を覚えしむるのである。

○縦走中左方(伊勢領)は昔乍らの原始林、右方(大和領)は世界一の進歩せる杉檜の人造林で、その對照が頗る面白い。

○歩行に長時間を要し大又まで到着出来なければ、案内人と相談の上國見ヶ嶽より西方一軒半(十數町)ばかり下りた山中に在る山小屋に宿泊する。こゝ(山小屋は二軒ばかりあるが案内人が居なければ所在不明)

○この縦走は三月下旬より四月中旬迄の頃が最もよい。

第三日 大又——三尾——官幣大社丹生川上神社中社——天誅組墓所——鷲家口——新子——上市町——大和上市驛。自動車賃八拾五錢。(大又からも大和上市驛までバスがある)

○蟻 通じて官幣大社丹生川上神社中社參拜、附近にある三川合流地附近の幽邃及魚見岩等を見物

荒神を祀り高野山の奥社として善男善女の參拜絶ゆることがない。

○頂上の眺望は絶佳にして大峯山脈の大偉容を初め中和、北紀の重疊たる山岳を望む、殊に遙か西天瀬戸内海の煙波に髣髴たる淡路島、友ヶ島の島影を望見することを得る等、その眼界の廣大なること近畿稀に見る所である。

○宿坊前の廣場より大峯山脈に冲する御來迎の崇巖や、瀬戸内海に沈む夕陽の美觀を眺むことができ。殊に落日の美は荒神ヶ嶽の名物にして、赤き夕陽淡路島の彼方に没する美觀は言語に絶す。

○荒神ヶ嶽登山は婦女子と雖も容易であり、殊に高野山より荒神ヶ嶽までの道路は山の脊梁を通過せるを以て眺望頗る佳良である。

○高野山熊谷寺前より荒神ヶ嶽まで一町(約百米)毎に町敷を刻したる石柱が建ち、また道も非常に良くなつた。

○十津川村と野迫川村との村界に泰然として聳ゆる伯母子嶽は遙かに荒神ヶ嶽を抜く秀峯である、呼ばば答へん眉宇の間には十津川郷や東南紀伊の雄

してから鷲家口東方の天誅組の墓へ參拜のこと。

備考

一、五萬分ノ地形圖吉野山、櫻井、高見山、大台ヶ原山携帶の事。

九、荒神ヶ嶽及高野登山、 附伯母子嶽登山

第一日 出發南海電車極樂橋驛下車の上ケーブル乗替高野山驛下車——高野山——荒神ヶ嶽頂上宿坊着泊徒歩十四軒(三里半)。

(高野山驛より女人堂まで十五町乗合自動車あり、十五錢)

○橋本驛下車玉川自動車にて終点奥ノ院の少し手前に下車すれば荒神ヶ嶽登山道なり。

第二日 荒神ヶ嶽——高野山見物の上——女人堂前乗車。

この日傳説お辰墓を訪ふこと。

備考

○荒神ヶ嶽は高野山の奥十六軒(四里)位にして、海拔一、二六〇米(四千二百尺)の頂上には三寶

大なる高嶺深谷疊々として重なり、その大陸的氣分は登山者の等しく嘆稱する所である。この登山は荒神ヶ嶽より北肢を経て平に到り、全地玉谷勘四郎氏に宿泊と案内を依頼するがよい。

(出發の日は荒神ヶ嶽を経て平泊、翌日は伯母子登山の上大股に下り水ヶ峯、大瀧を経て高野山に出づるがよい)。

○伯母子ヶ嶽より南に下山し十津川村神納川流域の五百瀬に到り、東して十津川添ひの川津に出づることをも得。

○五萬分ノ地形圖五條、高野山、伯母子ヶ嶽携帶のこと。

★ ★ ★

十、吉野山、山上ヶ嶽、洞川、荒神ヶ嶽 高野山連絡探勝旅行

この順路は古来より山上ヶ嶽と高野山とを連絡する唯一の路線にして道路よく案内人がいらぬ。

その道中の半ば以上は天ノ川の清流に添ひ佳景なる外、沿道には『坪ノ内辨財天』並に『野川辨財天』等がある。坪ノ内は由緒古く、吉野朝關係の御給旨や古文書等多く、又古き能面もあつて狂言が遺る。尙又來迎院には勝れたる佛像を祀る外、長慶天皇御陵傳説地その境内にある。

第一日 出發 大軌吉野線吉野驛下車 吉野山泊。

第二日 吉野山發 山上ヶ嶽登山の上洞川泊。三十六

軒(九里)

第三日 洞川發 荒神ヶ嶽着泊。四十二軒(十里半)

(途中阪本又は池津川に旅宿あり)。

第四日 荒神ヶ嶽發 高野山驛乗車、極樂橋驛乗替、難波驛着。十四軒(三里半)

○五萬分ノ一地形圖吉野山、山上ヶ嶽、五條、高野山、伯母子ヶ嶽を携帶すること。

○洞川より和田まで乗合自動車がある。十四軒(三里半)、運賃壹圓。

★ ★ ★

十一、高野山、荒神ヶ嶽、伯母子嶽より六里ヶ峯を経て龍神温泉に到り、牛廻山を越へ上湯温泉、下湯温泉を通り十津川郷の探勝

第一日 出發 南海電車極樂橋驛乗替、高野山驛下車 高野山——荒神ヶ嶽宿坊着泊。

○高野山にて名所舊蹟を十分に觀察の上奥ノ院より荒神ヶ嶽道に移る、徒歩十六軒(四里)

第二日 荒神ヶ嶽——北股——出合橋(平部落下にあり)——伯母子ヶ嶽——大股——北今西——弓手原。徒歩四十軒(十里)

又は荒神ヶ嶽——上垣内——水ヶ峯——檜股——弓手原 徒歩二十二軒(五里半)。

○北股を経て出合橋に到り伯母子嶽に登山の上大股に下り、それより川原樋川に添ひ湖江す。弓手原着の上は津本儀一氏、若くは宿舎にて十分地理の説明を受くること。(津本儀一氏方にて宿泊を引受けらる)。

○伯母子嶽に登らざる場合は平より大股に到る、この場合は十四軒(三里半)を短縮す。

第三日 弓手原——笹ノ茶屋——護摩ノ壇山——殿垣

内——龍神温泉着泊。徒歩二十八軒(七里)。

○本日は俗に謂ふ六里ヶ峯を縦走して護摩ノ壇山附近より道を右方(西)にせり龍神に向ふのである。

六里ヶ峯の縦走線附近は大抵萱や熊笹が繁り、深林は九合目以下を埋めておるから眺望を遮るものなく、驚く程の大観である。

即ち東は遠く大峯山脈の偉容、近くは十津川郷の群山、西は萬波起る南紀の重疊たる山岳を望みその壯觀は常に眼底に映じて快哉を叫びしむるのである。

○高野山より辻ノ茶屋、新子、箕峠、白口峯を経て笹ノ茶屋跡に出づる細徑あり、又笹ノ茶屋跡の少し手前より二軒(十七、八町)ばかり西南方に下れば由緒古き日光神社に出る、その庭前には明和二二丁亥六月吉祥日及寛文三卯年六月特日奉獻の石燈籠各一對あり、又參籠所もあり、日光神社より笹ノ茶屋に出づる細徑がある。

○白口峯より笹ノ茶屋に到る途中左側に鳥居があり潜つて登つた最高所が日光山仙慶陵(長慶天皇御

陵)と傳へらる、(笹ノ茶屋は倒壊して跡地を残すのみ)

○笹ノ茶屋跡又は其の少し手前より、日光神社を経て伏拜(△)の間に、上湯川に到らば、湯川川上流の右岸中腹に尾を越へ谷を亘りて散在する茅葺家屋の奇觀には一驚を喫するであらう、又この部落には平維盛卿の末裔と傳ふる小松家あり。上湯川より湯川川に添ひ凡そ十四軒(三里半)下らば清水に達し、それより有田鐵道金屋驛に到るバスあり(貳圓參拾錢)。

○護摩ノ壇山の頂上より西北方の肩(陸測地圖山の字の直上邊)に古笹の山小屋ありて二十人位宿泊する事が出来る。山小屋には番人が居り食事付宿泊が出来外、藪、蕨、燻、鍋釜、茶碗、茶瓶等の備付がある。(笹ノ茶屋跡より古笹まで三軒(二十七町)小屋より百米(一町余)計り東方に下れば水がある。

○笹ノ茶屋跡と古笹茶屋との中間一、二七七米△点の西南下より城ヶ森山に通ずる細徑を傳ひ暫く行くこ、越戒ノ瀧、衛門嘉門ノ瀧等、溪谷美を謳は

る小森溪谷を瞥見して殿垣内に出づる新設の細徑がある。

○一度殿垣内に下れば龍神温泉までは廣き道路である、龍神温泉は日高川の上流に沿ひ静寂なる環境にある清冽なる熱泉として世人の夙に知る所である。

○龍神温泉から紀勢西線南部驛迄。乗合自動車がある。(運賃參圓五拾錢) (難波を發し高野線、龍神自動車、紀勢西線、南海本線廻遊割引券あり。)

第四日 龍神温泉——牛廻山——古谷川——小壁——上湯温泉——下湯温泉着泊。
徒歩二八軒強(七里強)

○龍神温泉を發し、東して護摩ノ壇山脈の南方牛廻山をこえ、古谷川(上湯ノ川部落の内)に達し、それから上湯川の流に沿ひ市原、小壁を経て上湯温泉に着く。

○上湯温泉は出谷落部の直下、上湯ノ川の流れの左岸に所在し透明なる熱き硫黄泉である。温泉は道路より約百米(一丁)ばかり下方にありて清冽なる流に添ひ簡單なる湯壺の設けがある、また路

傍にはこの温泉を司る旅宿がある。

○五萬分ノ一地形圖を見れば道路は上湯ノ川の左岸を、流れより二百米(七百尺弱)計りも高所を通じおれどもこれは舊道である、阪なき新道は水面より餘り高からざる所の山腹を横に縫ふて平谷に達しておる。

○上湯温泉より二軒計り(凡そ二十町)下りて下湯温泉に着く。下湯も道路から百米(一丁)ばかり下方流れの左岸にある。この温泉は暖かきアルカリ泉で岩間より滾々湧き出てをる。

○上湯温泉も下湯温泉も兩岸は雲抜く高山に挟まれる幽遠なる流に添ひ附近には只山林事務所のような家が一軒あるのみで、少しの俗塵をも止めない。耳に聞ゆるは只潺々たる水音と聞き慣れぬ小鳥の聲のみ。

仙境であるこの湯に身を浸したる瞬間、靈氣は骨髓までも泌み渡り、『我は山の湯に浸る』の實感腦裡深く徹底するのである。

○本日は上湯温泉又は下湯温泉に泊し翌早朝出立して殿尾(平谷の一部落)に着けば、プロペラ下り

船に乗ることが出来るし、また平谷より玉置山に登り瀟八丁に行くのもよい。

○上湯温泉に泊し翌日出合殿井部落の對岸の向垣内より果無山を越へ、百前森山を経て萩に至るコースも中々面白い、果無山頂の平原は嬉しく、また山頂及萩西北△三九五・一米山から熊野川を俯瞰する眺望は實によい、尙果無山南側の數多き崩壊地には肝を潰す。(上湯より萩まで四時間乃至五時間)

○五萬分ノ一地形圖、(五條、高野山、伯母子嶽、龍神携帶の事)

十二、大峯山脈の縦走と大台ヶ原の登山とを終へて瀟八丁に到るコース

(前鬼口より大台ヶ原山迄の間を往復に二回通行せざる最良の道程)

大台ヶ原山までは第一項(大峯山脈の縦走及大台ヶ原山)に同じ、従つて此處の**第一日**は最初からは**第七日**目に當る。

第一日 大台ヶ原山東大台諸名勝見物の上——東ノ川

峡谷——出合泊。二十二軒(五里半)

第二日 出合發 浦向又は小口泊。二十四軒(六里)。

第三日 浦向又は小口發 玉置登山の上瀟八丁泊。四十軒(十里)又は北山峽に添うて大沼に泊し翌日瀟八丁に出づること。

備考

○**第一日**は大台教會より案内人を雇ひ東大台の諸名勝(秀ヶ嶽、正木ヶ原、牛右ヶ原、大蛇嶺)等を見物の上、尾鷲道と東ノ川道との分岐点まで送らしめたる上二軒余(二十數丁)の急阪を下りて、木組部落に出で、之を川まで下りつくこと、そこから下流上池原迄は東ノ川峡谷に沿ひ一ノ阪路も些の迷ひ所もなし。

この東ノ川は天に連る高山兩岸に峙ち岩打つ激流物凄く、鬱蒼たる深林を以て飾られたる峡谷である。

○木組から二軒(十七、八町)ばかり東ノ川を溯江せば大谷を経て薬師温泉に至る(冷泉)、尙溯江を續け大蛇嶺直下に到り之を見上ければ天空に轟立する大壯觀に接する事が出来る。(薬師温泉か

ら向一里ばかり奥までは道がある。

○出口又は出合から又口を経て尾鷲に到る事も出来る。(又口より尾鷲まで乗合自動車がある)

○第三日は浦向を發し笠捨山の嶮を越へ上葛川に出で、其處より玉置山に登り、巨杉鬱蒼たる中に建つ神さびたる玉置神社に参拜し、終つて絶頂に登り、過日來踏破して來た秀岳高峯の大健容を望んで快哉を叫び、然る後花折塚、下葛川を經るか。又は玉置川を經て瀟八丁に出づること。

又は小口から土場、神ノ上、大沼等を経て小松に到り、小松から川舟で瀟八丁に出づること。(二五——三四頁参照)

○五萬分ノ一山嶽圖大峯山脈及大台ヶ原山近傍圖及五萬分ノ一地形圖(木ノ本、十津川)携帶の事。

十三、川迫川を探り行者還ヶ嶽を横斷して天ヶ瀨橋に到るコース

第一日 出發 大軌吉野線下市口驛下車

下市口驛——下市町——丹生——川合——北角——モジキ谷——中井谷——(880)——河壺谷山小屋——

行者還ヶ嶽山小屋泊。(自動車賃壹圓五拾錢)二十

二軒(五里半)。徒歩十二軒(三里)。

○川合着の上は一軒弱(六、七町)西南行して沖金に到り、川迫川の地理に精しく、行者還ヶ嶽山小屋の所有者たり、又河壺山小屋の管理者たる米田富太郎氏を訪問し種々研究すること。

○中井谷出合、及河壺谷(布引谷の東ノ谷)にある山小屋は(880)より二軒弱(十五、六丁)あり。年中人住み頼めば何時でもとめてくれる。

○行者還ヶ嶽山小屋は米田富太郎氏が多大の犠牲を忍んで登山者のために奉仕的に建設したるものにして立派なものである、毎年七月五日より八月十五日までは番人居住せり。

○全山紅葉に染まり錦繡を纏ふの候(十月十五日頃より月末迄の間)豫め米田氏に照會しおき、行者還ヶ嶽の山小屋に泊し、翌日大峯山脈を縦走して山上ヶ嶽に出づれば、宛然絢爛なる繪畫の中に遊ぶ思あり、切に諸君に其實行をおす、めす。最も美しきは國見ヶ嶽と小普賢ヶ嶽(直大普賢ヶ嶽北の突起)との間である。

第二日 行者還ヶ嶽山小屋——新田——天ヶ瀨川——

天ヶ瀨橋——今西茶屋——柏木——大和上市驛。

徒歩 七軒(二里弱) バス五十八軒(十四里半) 二圓九十錢

○天ヶ瀨橋とは天ヶ瀨川と縣道上市木ノ本線と交叉する地点なり。天ヶ瀨橋より柏木迄の自動車は一日二回よりなき故注意を要す。

○出立前、行者還ヶ嶽の頂上に到り四方の眺望を恣にする事を忘れてはならん、又頂上より北へ下り峯中道に取りつき大普賢ヶ嶽の方に行くのも面白い。

十四、天川、大塔、野迫川方面を探り高野山への探勝

第一日 出發 大軌吉野線下市口驛下車

下市口驛——下市町——丹生——川合——南日裏——和田——川瀨峠——篠原。

バス一圓九十五錢、四十軒(十里)。徒歩十軒(二里半)。宿料 一圓二十錢位。

○和田より四軒(一里)の急阪を登りて、天ノ川と

舟ノ川との分水嶺たる川瀨峠を越へ又六軒(一里半)の急阪を下りて篠原部落につく。(和田より篠原まで四時間以上を要す)

○川瀨峠より東方二軒ばかりの天和山頂に到れば、その眺望は實に廣大を極め、快哉を叫ばねばおられない、されどこの間の道は難儀なり。

○川瀨峠より下り阪の途中、岩石ありて南へ細徑の分岐点(陸測五萬分ノ一釋迦ヶ嶽参照)の處より少し東へ行き、其處より東方を見れば大峯山脈の西側及舟ノ川の源流一帯の大觀を恣にする事が出来る。

○篠原部落は昭和聖代の今日尙現實に見る桃源郷にしてその驚嘆すべき急斜面の耕作地と、太古の如き偉ある生活状態は驚異の目を睜らざらんとするも得ない。

○本夜は古老を訪ひて數々の異習奇談傳説等の外、有名なる篠原踊の研究をなす事は有意義である。

第二日 篠原——惣谷——中井傍示——清水——中津川——立里——荒神ヶ嶽。

徒歩 二十八軒(七里)。宿料壹圓參拾錢。

○舟ノ川を下り天ノ川を横断し河原樋川を眺めつゝ
中津川に到り立里を経て荒神ヶ嶽に着く。

第三日 荒神ヶ嶽——陣ヶ峯——櫻峠——高野山奥ノ
院——高野町——高野山驛ケーブル乗車。

十五、吉野群山の峽谷探検

吉野群山はその峽谷美を誇りこなし、絶壁、飛瀑、
碧潭等々驚嘆すべき大絶景無数に配列しこれ等を飾る
神秘そのもの、如き千古の原始林は晝尚暗く、人一度
この幽邃境に身を置かば一切の慾望妄念は忽ち飛散
し、恍惚として仙境に在るの思をするのである、さて
この大峽谷を探検せんとするには五萬分ノ一地形圖に
よりその概念を得た上で左記の箇所知らんとする事
項を記し郵券封入の上問合せらるゝがよろしい。

記

◇舟ノ川の峽谷

大塔村 大字 篠原 阪谷 留吉氏

◇河原樋川の峽谷

野迫川村 大字 池津川 同 村 役 場

◇旭川の峽谷(宇無川の峽谷、中の川峽谷)

若たらしむる程の大峽谷である、即ち本流大杉谷及支
流大和谷、父ヶ谷、不動谷を通して峽中は激流、碧潭
絶壁、瀑布の連続で實に變幻極りなき大景観である、
殊に大杉谷の特徴としてかの黒部と雖も決して追従を
許さざるは瀑布の無数なること、しかもそれは豪壯に非
ずんば奇觀の妙を極めてゐるのである。瀑布は本流及
支流を通じて無慮百位を數へらるべきも就中千尋、不
動、ニコく、七ツ電、光、堂倉、ピツクリ、夫婦等
の諸瀧は人皆驚嘆措かざる大作品である。

而して御料の原始林はこの峽谷一帯の天地を埋めて
天日も爲に暗く、古來この深林は伊勢神宮御造營御用
材を産する神域として尊崇され來りしものである。

實に吉野群山の奥深き處、雲霧に鎖されて横ばるこ
の大杉峽谷こそは皇國秘藏の大風景にして永遠に尊重
してその清淨を嚴守すべき天寶なりと斷言するを憚ら
ぬのである、然るに近年漸次濫伐の厄を見つゝあるは
惜むべき限りである。

さて、この探検コースは幾様にも考へらるゝが大休
次の七種に分つことが出来ると思ふ。

一、大杉——を溯り最上流に達し、堂倉谷を溯りて大

十津川村 大字 旭 弓場利孝氏

◇瀧川の峻谷

十津川村 大字 内原 鶴谷 豊里氏

◇前鬼川峽谷

下北山村 大字 前鬼口 穂本 要治郎

◇東の川峽谷

上北村 小字 木組 辰巳 三代七氏

◇白川又川の峽谷

上北山村 大字 河合 福島 清七氏

◇北股川の峽谷、三の公川峽谷

川上村 大字 入之波 保田 又二郎氏

◇池川峽谷

大和上市町 吉野熊野國立公園協會

◇上多古川峽谷

川上村 大字 上多古 松本 孝治郎氏

(大杉峽谷及川迫谷、彌山谷に付ては別項に記載せり)

十六、大杉大峽谷の探検

台高山脈に水源を發する宮川の最上流即ち大杉部落
以奥は之を俗に大杉谷と稱へ、かの黒部をして後に蝶

台街道に出る、又は栗谷を溯りて大台街道に出る
又は西谷を溯りて大台街道に出る。

大台街道に出るに大台辻を経て大台教會に到るか
又は堂倉谷御料林事務所前より細徑を攀ちて秀ヶ
嶽に登り、大台教會に到る(三、四日を要す)。

二、以上の逆コース。

三、大杉——父ヶ谷を溯り最上流南谷北谷の合流点に
ある御料林事務所——山道を辿り不動谷に達し—
—本流との合流点より本流を溯る。(四、五日を
要す)。

四、引水(大台登山道が吉野川の最上流に於て川と離
れる(右邊)より東して國境山脈を横断して不動
谷の源流に出で不動谷を下つて本谷との合流点に
到り(引水より國境を横断するには四筋あり)——
—本谷を溯る(四、五日を要す)。

引水より檜の平を経て國境に達し、それより大凡
〇、五軒(四町位)ばかり南行すれば、二〇三鞍部
に到る、それから高洞谷(不動谷上流の北谷)に
つく木材運搬路を傳ひ、ロクダイ山林事務所(地
圖不動谷の動ノ字の邊)を経て不動谷を下る。

五、大台又は秀ヶ嶽——堂倉谷御料林事務所——大杉に通ずる山道を辿り嘉茂助谷山林事務所につき、それより桃ノ木橋に通ずる山徑を辿るか、(五萬分ノ一地圖に記入なし)又は千尋瀧下に到りて本流を測る。

六、入之波を發し三ノ公川を溯江し支流「キノコマタ谷」を溯つて國境山脈を横斷して(△1098.4より二百米計り北方を)交ヶ谷の北谷を下つて南谷との合流点を経て大杉に到る、又はこの逆行。

備考

陸測地圖には明神瀧は「キノコマタ谷」合流点の下流に記されておるが、これは誤りであつて、實際は「キノコマタ谷」合流点より尙上流にあるのである。

七、大和谷の探檢は大杉を發し、溯江して地池谷の合流点より右し最奥夫婦瀧の壯觀を見て引返すか、(二日位)、又は國境山脈を越へ北股川に達し中奥に出るか、又は北股川を下つて入之波に到る、或はこの逆行(二、三日を要す)以上何れも案内人を引つれる事は絶対必要の條件であるが、昭和六

年迄は大杉峡谷の全容を知る案内人は全く皆無の狀であつた、併し同年に至つて漸く數名の精通者を得るに至つたのである。

而して案内人は豫め左の所へ申込み返事をもつておかなければならぬ、又帝室林野局所管大杉谷御料林内事務所或は從業人夫小屋に宿泊せんとする場合は名古屋市東區武平町帝室林野局名古屋支局愛知出張所の認可を受けなければならぬ。

記

◆案内者申込所

(イ) 三重縣多氣郡大林谷村役場内

山 岳 部

(ロ) 大 和 上 市 町

吉野熊野國立公園協會

但し(イ)の方の紹介者は國境を越へて吉野川の源流を下るコースを知らない。

◆山林事務所又は小屋の所在地

(イ) 千尋瀧頭山の小屋……(千尋瀧の頭にあり)

(ロ) 千尋瀧一本杉の事務所……(千尋瀧頭山の小屋より二軒弱谷上にあり、陸測地圖に明記せ

り、ここには人夫小屋もあり)。

(ハ) 千尋瀧上の鐵索事務所……(千尋瀧頭の山小屋の直上四町位の所にあり)。

(ニ) 嘉茂助谷の事務所……(嘉茂助谷の中流にありて陸測地圖に明記せり)。

(ホ) 喜茂助谷の山小屋……(全 上)

(ヘ) 堂倉谷の事務所……(大台街道が堂倉谷を横斷する所にありて陸測地圖に明記せり)。

(ト) 堂倉谷の山小屋……(全 上)

(チ) 栗谷の山小屋……(栗谷と大台街道とが合する地点に數戸あり)。

(リ) 不動谷下の山小屋……(不動瀧直下と、不動谷が本流と合流する点との中間にあり)。

(ヌ) 不動谷上の山小屋……(不動瀧肩より一軒(九町)余奥上にあり)。

(ル) 不動谷ロクタイ事務所……(陸測不動谷の動ノ字の邊にあり)。

尙ここに數戸の山小屋ある外、その上流凡そ

(チ) 二軒(十八町)の所にも數戸の山小屋あり。

(チ) 岩小屋……(本流が不動谷との合流点より

〇、五軒(四町位)計り本流を溯りし所にありて陸測地圖に明記せり)。

(ワ) 交ヶ谷事務所……(交ヶ谷最上流北谷と南谷との合流点附近にあり陸測地圖に明記せり)。

(カ) 交ヶ谷の山小屋……(全 上)

(ヨ) 地池谷の事務所……(大和谷と地池谷との合流点より一軒(九町)計り上流にあり)。

備考

大杉部落を起点として探檢する場合は參急松坂乗換紀勢東線三瀨谷驛下車。

三瀨谷驛——天ヶ瀧——岩井——大杉。(岩井大杉間六人乗貸切運賃貳圓五拾錢)

バス、二十四軒(六里)。片道 壹圓拾錢。徒歩八軒(二里)。

大台ヶ原山方面を起点とする場合は大阪出發、大和上市驛下車。

(イ) 大和上市驛——柏木——入之波——大台辻——堂倉谷事務所。

バス 壹圓九拾錢 徒歩 二十軒(五里)

(ロ) 入之波——大台辻——大台教會 以上二十軒

(五里)
大台教會——秀ヶ嶽——堂倉谷事務所 八軒
(二里)

十七、川迫谷及び彌山峡谷の探勝

第一日 下市口驛——川合——熊谷橋——八丁河原——
慕瀧——一ノ瀧下(露營)、バス二十二軒(五里半)一圓五十錢 徒歩約十二軒(三里)
第二日 一ノ瀧下——二ノ瀧——三ノ瀧——(左岸に渡り高廻り)——千人嶺下——雙門ノ瀧前——(右岸高廻り)——雙門瀧上——河原小屋(露營)
第三日 河原小屋——狼平——彌山——八經ヶ嶽——彌山——川合——下市口驛 徒歩十八軒(四里半)バス 二十二軒(五里半)一圓五十錢。
○天ノ川の上流川合以奥を川迫川と云ひ比較的手近な割合に趣の多い溪谷である。尤も四周鬱蒼たりし原始林伐採前の如き幽玄味は失はれてゐるが、本流の川添に神童子谷出合(380)迄森林軌道や道があり探勝出来るから都合がよい。

中にも上流即ち彌山峡谷と神童子峡谷かその最たるもので、殊に前者が勝れてゐる。併し非常な悪場で凄壯たる巖壁と瀧の多いので鬼氣人に迫る云ふすばらしさがある。さればその探検は特殊のエキスパート以外には推奨出来ない。
精々身輕とし荷物には必ず工夫に持たせ案内者を雇入れ、ザイルを携帯せしむること、履物は草鞋を適當とす、案内者は川迫谷の中井谷中谷綱五郎氏に依頼のこゝ(吉野郡大川村字南角留置)
○携帶地圖五萬分一山嶽圖大峯山脈及大台ヶ原近傍圖

附。ハイキングコース

一、吉野山、高サギ岳、峯山コース

出發 大軌吉野線下市口驛 下車
下市口驛——千石橋を渡り——北口——日光寺——峯山——馬草池——奥ノ井峠——高サギ岳——菅原池——高サギ岳——檜尾——櫻峠——銅ノ鳥居——吉野驛十軒(二里半)。

○千石橋を渡り西迎院前サイコウで縣道と別れ左折し北口を通り日光寺に參詣す、日光寺は角乘(役ノ小角ノ弟子)の創設と傳へらるゝ眞言宗の寺院にして本尊は秘佛藥師如来なり。

○日光寺下より右にこり近道を登つて峯山に到る、峯山は下市街の北方背後の高き台地にして、金剛、葛城、二上、高取、龍門、栃原の諸山手に取る如く又近景には吉野川の清流と沿岸の部落展開す、峯山は今より凡そ九十年前五條代官内藤李左衛門の奨勵により移住民の開墾せる農耕地である。

○峯山を過ぎて縣營砂防工事地に到り、二町計り左方(北方)へ道寄すれば山峽に横たはる馬草池あり、この池は一名バツチ池と稱し馬蹄形をなす、堤坊上には拜殿ありて對岸に半島の如く突入せる山地の中腹に祀る龍王社に面せり。(五萬分地形圖にはバツチ池を印せるも、此處に到る路は近頃の創設に係るを以て記入なし)。

○馬草池以奥の路は幅も狭く、又全く山林中を通ず、池より三四町行き小突起を越ゆれば前方稍左寄に本日の最高峯たる高サギ岳を望む。

○奥ノ井峠(立石より小路シヨウジに通ずる道なるも地圖には記入なし)を過ぎて暫く行けば登りとなる、この途中より大天ヶ嶽、山上ヶ嶽、百貝嶽等を望む。阪ノ最高所が高サギ岳にして海拔千四百尺(124.1米)ありて三角点は路より凡そ二十間計り上にあり。

○高サギ岳の外れに立つ送電線の鐵塔より電線に添ふて凡そ五町下れば菅原池(俗に杉原池)に達す、この池は吉野郡第二の大池にして山懐に抱かれて満々水を湛へたるその情景は稍凄愴の感がする。

○菅原池を見て鐵塔に引返し、引續き山脊を十數町行き屈曲点を越ゆれば眼前に吉野山の部落を眺め、又遠景には高見山を初めその北方に聳ゆる曾爾群山を望む、此處より三、四町にして地藏尊を祀る櫻峠なり、櫻峠より左方(北)の幅廣き道を下り十町ばかり行けば上り阪となる、途中の分岐点より右方にミれば銅の鳥居に到る。

○峯山より櫻峠に到る路は大字界や町村界をなす一小山脈の山脊に通ざるを處々に若干の上り下りあり、又兩側へ下る道あるも常に山脊を行けばよく、又當協會に於ては多くの指道標を建設したから迷ふこと

はなく、距離も頃合ひで婦人子供にも好適のハイキングである。

○このコースの大部分は人家を離れて山林中を通じ又溪流や池等も見て爽快と幽玄の感を催すのである。尙又處々に眺望を恣にする等の塵外境にして山の猛者運にも喜ばれるのである、しかも交通機關に近く全く廻り出し物さ云ふ事が出来ると思ふのである。備考 携帶地圖五萬分地形圖吉野山

二、百貝ヶ嶽より吉野山へ

出發 大軌吉野線下市口驛下車
 下市口驛——下市町——岩森——立石——才谷——鳥住——鳳閣寺(鳥住所在)——石ノ塔(鳥住所在)——百貝ヶ嶽。
 百貝ヶ嶽——(以下吉野山)——西行庵——金峰神社——水分神社——吉野神宮——吉野神宮驛。徒歩十五軒(三里半強)バス參拾錢、八軒(二里)。
 備考
 ○五萬分ノ一地形圖(吉野山、山上ヶ嶽)携帶のこと。
 ○鳥住に於て吉野山西行庵まで案内人を雇ふか、又は

十分地理の説明をきくこと。

○石ノ塔は特別保護建造物にして鳳閣寺と共に理源大師の遺蹟である。鳳閣寺には理源大師が彌山聖寶の宿に於て退治せりといふ大蛇の白骨がある。
 ○百貝ヶ嶽も理源大師の舊蹟にして、頂上よりは大峯山脈の大壯觀季に取る如く眼前に展開する外、攝河泉紀州の山川を望むこゝができる。

附 録

- 一、吉野群山及熊野地方探勝乗合自動車、プロペラ船等に関する詳細は次の所へ御問合のこと
- 一、大和上市驛以奥(川上、大台、小川、高見方面旅行の場合)
- 大和上 市驛前 大軌吉野鐵道線自動車部
- 全 所 都司自動車商會
- 二、全 上(北山方面)
- 吉野郡上北山村河合 北山自動車株式會社
- 三、下市口驛以奥(天川、丹生、黒瀧方面旅行の場合)

- 吉野郡大淀町下淵 吉野自動車株式會社
- 全 所 大峯自動車株式會社
- 四、五條驛以奥(大塔、十津川方面旅行の場合)
- 宇智郡 五條町 普賢自動車株式會社
- 五、熊野方面旅行の場合
- (イ) 新宮、木ノ本間
- 三重縣南牟婁郡木ノ本町 南紀自動車株式會社
- (ロ) 阿田和、平谷間及阿田和、小川口間
- 三重縣南牟婁郡木ノ本町 南紀自動車株式會社
- (ハ) 木ノ本、尾鷲間
- 三重縣北牟婁郡 尾 鷲 驛 長
- (ニ) 木ノ本、小口間
- 三重縣南牟婁郡五郷村 五郷自動車株式會社
- (ホ) 串本、周參見間及本宮、湯峯、田邊間

- (ヘ) 和歌山縣田邊町 熊野自動車株式會社
- (ハ) 龍神、南部間
- 和歌山縣南部町 龍神自動車株式會社
- 六、新宮驛八丁間新宮、本宮、折立間プロペラ船
- 和歌山縣新宮市 熊野川飛行艇株式會社
- 七、熊野灘方面の航海
- 大阪市北區宗是町 大阪商船株式會社
- 八、三瀧谷驛以奥(大杉峽谷探檢の場合)
- 三重縣多氣郡三瀧谷驛前 大杉自動車株式會社
- 九、櫻井驛以奥(高見登山の場合)
- 宇陀郡松山町 宇陀吉野自動車株式會社
- 十、榛原驛以奥(高見登山の場合)
- 宇陀郡 榛原町 參急自動車株式會社

二、吉野群山熊野方面及其附近の宿料其他一覽表

地名	宿 料		宿泊のみ(食事なし)	わらじ代
	一般登山者(円)	團 体(円)		
吉野山	二、〇〇〇	一、七〇〇	一、五〇〇	〇、八〇〇

下市口驛以奥の部

1.80	1.10	30	洞川
1.50	80	川合	
85	丹生		
下市口			
		和田	
	坪ノ内	25	
	川合	20	
		45	

下市口	60
	坂戸

五條驛以奥の部

				山崎
		辻堂	2.00 3.30	
	阪本	40 55	2.40 3.90	
	1.00 1.80	1.40 2.45	3.40 5.35	
	70	2.10 3.50	4.10 6.50	
五條	1.25			

往復材料及金

昭和十三年六月二十日印刷
昭和十三年六月二十五日發行

奈良縣吉野郡大淀町大字北六田二五番地ノ二

編輯人 岸田日出男

奈良市東向南町二九番地

印刷所 梅田商店印刷部

奈良縣吉野郡上市町大字上市一三五番地

發行所 吉野熊野國立公園協會

振替 口座 大阪六三二八八番

終

